

「平成30年度地域づくり団体活動支援事業」



シルクロード・ネットワーク・鶴岡フォーラム2018

シルクロードでつなぐ街と人

サムライゆかりのシルクから、絹遺産の再生・継承を学ぶ



国史跡松ヶ岡開墾場1番蚕室（現松ヶ岡開墾記念館）

写真提供：鶴岡市

平成30年6月23日（土）

見学会

平成30年6月24日（日）

フォーラム・事例報告

会場：鶴岡市先端研究産業支援センター レクチャーホール

主催：公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）

NPO法人 街・建築・文化再生集団（RAC）

共催：鶴岡市

後援：山形県・群馬県・大日本蚕糸会・上毛新聞社

## ーシルクの街・横浜より ごあいさつー

シルクロードネットワークは今年で4年目を迎えます。第1回目の横浜大会以降、開催地が東北地方に移り、ますます絹文化が全国に広範囲に広がっていることに改めて感動いたします。

今、話題に上っている「長崎と天草の潜伏キリシタン遺産」をイコモス（国際記念物遺跡会議）がユネスコへ世界文化遺産登録に向けた勧告をおこなったことにより、登録が現実味を帯びてきました。実は、長崎の教会では、自立のために農業や食品づくり他、様々な事業を行っていました。その中に、養蚕も含まれていたのです。

今回、世界文化遺産の構成遺産となる長崎県外目出津地区での養蚕活動の報告が掲載されておりますが、養蚕は実にオールマイティーであることを実感する次第であります。絹産業は、我が国の近代化を心底から支えた力持ちであることを再認識した次第です。どうぞ2日間に亘り情報の交換や交流を通じて絹文化の継承を推進して参りたく存じます。

なお、この場をお借りして鶴岡市長様をはじめ関係の皆様にご心よりお礼申し上げます。

平成30年6月23日

公益社団法人横浜歴史資産調査会  
(ヨコハマ ヘリテイジ)  
会長 宮村 忠



歴史の舞台、長崎の港街

写真：米山 淳一



## ーネットワークの面としての展開をー

### シルクロード・ネットワーク・鶴岡の開催によせて

横浜から、新庄、福島、そして鶴岡と、ひとつの繭から糸が紡がれて、点は線として結ばれ、次第に織り重ねられ面へと広がる、5年目を迎えましたシルクロード・ネットワークの現況は、まさにそのように表現できると思います。

現在の日本で、養蚕・製糸は産業として影が薄くなってきていることは否定できないと思われます。しかし、これまでに築かれた遺産は各地にまだ色濃く確認できますし、地域のアイデンティティを確実に支えています。これからを考えるという視点から、私は遺産が資産と呼び替えられるべきではないかと思っております。残された（「遺」）残影としてではなく、これからの地域を創り出す（「資」）蓄積であると捉えるからです。養蚕・製糸に関わる遺産をもつ地域は、それを核として、また軸として今後の展望を構想していくことのできる資産をすでに抱えている、といえます。さらに、その地域同士が協働していくとき、これまでみられなかった織物のような、個性を保ちつつ繋ぎあっていく地域づくりが可能になると思われます。

養蚕・製糸は、地域限定ではなく、社会全体に関わり広がりをもつという意味からすると、その発想や方法は洗練、純化されて、地域に活力を与えてきたのではないかと考えます。松ヶ岡開墾場を拝見できることを楽しみにしておりますが、単に群馬県の島村に範を求めたというより、島村の養蚕民家のもっていたより本質が表現されている建物と思われるからです。横浜は海外との接点としての意味をもちますが、横浜を含め各地のまちは、点と線と面のなかで存在してきたといえるのではないのでしょうか。

先日、旧富岡製糸場を訪れる機会があり、説明を聞いていたのですが、解説ははまだ群馬のなかと、突如海外との関係からなされ、こうした広がりのある話しを耳にすることはできませんでした。その富岡製糸場ですら埼玉の力なくては、そして全国の支えがなくては機能しなかったわけですから、その位置づけの地域に限られがちの見方には、寂しさすら感じました。

第4回の今回は、鶴岡市様からのご支援もいただき、順調に開催できることになったと伺っております。鶴岡市で関わられたかたにお礼を申しあげるとともに、今回の大会がまた新たな織りを創造すること期待しております。

平成30年6月23日

NPO 法人街・建築・文化再生集団理事長  
理事長 星 和彦



松ヶ岡開墾場が参考にした島村 田島弥平家の主屋と蚕室『続養蚕新論』より

## 横浜と信州・稲荷山との交流拠点「横濱屋」プロジェクト

善光寺街道の宿場町や商業都市として発展してきた稲荷山（長野県千曲市）は街道の両側に土蔵造の町家が軒を連ね、心地よい町並み景観を形成している。平成28年には国重要伝統的建造物群保存地区に選定され、町家の修理や修景が始まっている。

稲荷山は飯山に向けた谷街道の起点でもあり交通の要衝。そのため多くの物資が行き交い、特に絹製品の集散拠点としても大いに繁栄していたのである。その証が豪壮な土蔵造りの町なみである。特に明治期には横浜との交易が盛んに行われますます、富の蓄積は高まって行った。

その縁を大切にしたいプロジェクトが「横濱屋」である。稲荷山宿の新町地区に残る明治中期町家で伝統的建造物である旧倉石忠雄家住宅（元衆議院議員・労働大臣等）を当ヨコハマヘリテイジが所有者からお借りし、修理、修復を行った後に横浜と信州・稲荷山の交流拠点として活用・公開する計画である。

事業は千曲市や稲荷山地区の皆様と力を合わせて推進し、平成30年度から建物の現況や復元、活用調査事業を開始する。

どうぞ、皆様のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）

常務理事 米山淳一



伝統的建造物群保存地区（稲荷山の町並み・荒町地区）



旧倉石忠雄家住宅の外観



屋敷裏手にある土蔵

## 講師プロフィール

- 富所 弘充（とみどころ ひろみつ） 国土交通省都市局公園緑地・景観課 景観・歴史文化環境整備室課長補佐  
1981年 東京都生まれ  
2007年 東京大学大学院農学生命科学研究科修士課程修了後、国土交通省入省。  
国土交通省関東地方整備局国営昭和記念公園事務所調査設計課長、復興庁統括官付参事官付参事官補佐  
（福島の復興・再生を担当）を経て、2017年7月より現職
- 梅津 章子（うめづ あきこ） 文化庁文化財部参事官付文化財調査官  
1970年 東京都に生まれる  
1992年 千葉大学工学部建築学科卒業  
1999年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻単位取得退学  
2001年 文化庁文化財部建造物課（伝統的建造物群部門）  
2007年 文化庁文化財部建造物課（整備活用部門）  
2009年 文化庁文化財部伝統文化課保護調整室  
2012年～現職 文化庁文化財部参事官付文化財調査官
- 田中 尹（たなか ただし） 元鶴岡織物工業協同組合理事長・元松岡蚕種(株)社長  
1931年 鶴岡市に生まれる  
1954年 東京農工大学繊維学部養蚕学科 卒業  
1972年 松岡蚕種株式会社社長、山形県蚕種協会会長に就任  
1990年 松岡機業株式会社社長に就任  
2004年 鶴岡織物工業協同組合理事長に就任  
2011年 80歳を機に、全ての役職を辞す  
現在 松ヶ岡開墾場顧問、致道博物館顧問。  
鶴岡シルクの歴史を綴った『鶴岡の絹』を執筆中。乞うご期待！
- 高谷 時彦（たかたに ときひこ） 東北公益文科大学大学院特任教授、設計・計画 高谷時彦事務所代表  
1952年 香川県に生まれる  
1976年 東京大学工学部都市工学科卒業  
1976年 楨総合計画事務所勤務  
1989年 設計・計画 高谷時彦事務所設立  
2000年～ 神奈川大学非常勤講師（～5）東京大学非常勤講師（～2）  
2005年 東北公益文科大学大学院特任教授  
2011年 芝浦工業大学非常勤講師  
公職等（鶴岡市）  
鶴岡市景観委員会・鶴岡市歴史的風致維持向上計画協議会・鶴岡市都市再興基本計画策定市民懇話会座長等  
受賞等（鶴岡市）  
日本建築学会作品選集選定：鶴岡市立藤沢周平記念館（2010）・日本建築学会作品選集選定：鶴岡まちなかキネマ（2013）・  
日本建築学会作品選奨：鶴岡まちなかキネマ（2013）他多数

□後藤 治（ごとう おさむ）（NPO 法人 街・建築・文化再生集団理事・工学院大学理事長・工学博士・一級建築士）

1960年 東京生まれ

1988年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程中退、文化庁文化財保護部建造物課調査官を経て、1999年工学院大学建築都市デザイン学科助教授（建築史・建築保存修復学）、建築学部建築デザイン学科教授、2000年 RAC理事に就任、2017年 工学院大学理事長に就任

2015年 シルクロード・ネットワーク設立

委員等：NPO 法人 木の建築フォーラム理事／稲荷山地区伝統的建造物群保存対策調査委員会委員他

著作等：『建物の見方・しらべ方 江戸時代の寺院と神社』（共著）『建築学の基礎6 日本建築史』、『都市の記憶を失う前に』、『それでも「木密」に住み続けたい』等、多数

東日本大震災の復興に対しては、石巻市での『東北に美しい村を復興する Project』に携わる。

□米山 淳一（よねやま じゅんいち）（公益社団法人横浜歴史資産調査会常務理事、RAC 理事）

1951年 神奈川県横須賀市生まれ

1974年 獨協大学外国語学部 英語学科卒業、財団法人日本ナショナルトラストに入所、事業局長を経て退所

2009年 公益社団法人横浜歴史資産調査会常務理事・事務局長に就任、2014年 RAC理事就任

2015年 シルクロード・ネットワーク設立

現在、獨協大学オープンカレッジ講師 NHK文化センター（青山）講師・東映株式会社「大鉄道博覧会」企画プロデューサー・日本鉄道保存協会顧問

著作等：『地域資産 みんなと奮闘記』、『歴史鉄道 酔余の町並み』ほか

□星 和彦（ほし かずひこ） NPO 法人 街・建築・文化再生集団（RAC）理事長・前橋工科大学学長・工学博士

1951年 東京、駅舎の有名な国立生まれ

1975年 東京都立大学卒業、東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程単位取得満期退学

1994年 前橋市立工業短期大学助教授（建築史・建築文化資源学）に奉職、前橋工科大学助教授、教授を経て、

2015年前橋工科大学学長に就任

1999年 NPO 法人 街・建築・文化再生集団設立、理事長

2015年 シルクロード・ネットワーク設立

委員等：群馬県景観審議委員／群馬県景観アドバイザー／日本建築学会関東支部建築歴史／意匠専門研究委員会委員  
シェークスピアからディケンズにかけての英国建築史と建築文化をこれからの社会の資源として確立する方法をテーマに西洋建築史（英国建築史）、歴史的環境（建築文化資源学）を専攻する。

## ● レポート目次

・ 歴史まちづくりの取組を通じた地域活性化：		
	富所 弘充（国土交通省都市局公園緑地・景観課 景観・歴史文化環境整備室課長補佐）	8
・ 鶴岡の絹ー松ヶ岡開墾場から現在までー：	田中 尹（元鶴岡織物工業協同組合理事長・元松岡蚕種(株)社長）	12
・ 鶴岡シルクの伝統を未来へー鶴岡シルクタウン・プロジェクトー：	奥山真裕（鶴岡市政策企画課）	13
・ 木造絹織物工場を映画館にー産業文化遺産で映画を楽しむまち鶴岡ー：		
	高谷 時彦（東北公益文科大学大学院/設計計画高谷時彦事務所）	15
・ 西郷どんとサムライシルク：	大西 孝彦（フリーライター）	19
・ 山形県新庄市 旧農林省蚕糸試験場新庄支場（新庄市エコロジーガーデン「原蚕の杜」）：		
	尾上 直樹（新庄市商工観光課クールジャパン新庄推進室）	22
・ 山形県新庄市 旧蚕糸試験場新庄支場 第五蚕室の活用及び改修工事について：	中村出（株式会社ヤマムラ）	23
・ 今も残る近代福島遺産：梅津 司（福島市教育委員会文化課文化財係）		24
・ 「シルクロード・ネットワーク・ふくしまフォーラム 2017」に参加して：	村川友彦（福島市文化財保護審議会委員）	25
・ 国登録有形文化財「旧農林省蚕糸試験場日野桑園第一蚕室」について：		
	大日向 均（東京都日野市生涯学習課文化財係）	27
・ 長野県 <sup>ちくまし</sup> 千曲市の絹の道 蚕糸業：	矢島宏雄（千曲市歴史文化財センター）	28
・ 世界遺産候補地・外海と養蚕の記憶について：	日宇スギノ（フェルム・ド・外海（長崎市）代表）	30
・ 白川郷田島家養蚕展示館：	三島 敏樹（白川郷田島家養蚕展示館々長）	31
・ 埼玉の絹文化をめぐる市民活動レポート：	藤井 美登利（さいたま絹文化研究会事務局・NPO 川越きもの散歩代表）	32
・ 裏絹で栄えた小川町 その歴史的遺産の活用に向けて：	平山友子（NPO 法人小川町創り文化プロジェクト理事）	34
・ 野島公園旧伊藤博文金沢別邸の保存・活用に係る取り組みについて：	寺岡 真理子（公益財団法人横浜市緑の協会）	36
・ 近代蚕糸業の革命児・速水堅曹：	手島 仁（前橋学センター長）	39
・ 前橋から発信する絹遺産周知ツール：	臼井敬太郎（前橋工科大学工学部建築学科 講師）	42
・ 絹の集積地「前橋」から発信する絹産業遺産ーまちなか養蚕とシルクカードについてー：		
	平澤宙之（RAC/上州文化ラボ/群馬県立館林商工高等学校） 石田真弥（RAC/東京文化財研究所）	43
・ シルクロード・ネットワーク・ふくしまフォーラム 2017 記録		45

● 6月23日(土)「シルクロード・ネットワーク 鶴岡フォーラム2018」鶴岡絹遺産見学会

12:30~13:00 東京第一ホテル鶴岡 集合・出発

13:00 鶴岡駅 発

13:10~13:40 鶴岡まちなかキネマ：高谷先生にご解説頂きます。

14:00~14:50 国史跡松ヶ岡開墾場（本陣で解説後、自由観覧）

15:10~16:00 丙申堂（国重文旧風間家住宅）

16:10~17:00 致道博物館（国重文旧渋谷家、同旧西田川郡役所、同旧鶴岡警察署、御隠殿）

17:30 東京第一ホテル鶴岡 到着解散

18:30~20:30 交流会：東京第一ホテル鶴岡 宴会場

● 6月24日(日)「シルクロード・ネットワーク 鶴岡フォーラム2018」

会場：鶴岡市先端研究産業支援センター レクチャーホール

9:40~10:00 フォーラム 開場

開会 米山 淳一（公益社団法人横浜歴史資産調査会常務理事・RAC理事）

来賓ご挨拶 鶴岡市長皆川 治様

10:00~12:10 基調講演・基調報告

基調講演 「歴史まちづくりの取組を通じた地域活性化」

富所 弘充さん（国土交通省都市局公園緑地・景観課

景観・歴史文化環境整備室課長補佐）

基調講演 「歴史・文化を活かしたまちづくりー文化財行政の役割ー」

梅津 章子さん（文化庁文化財部参事官付文化財調査官）

基調報告 「鶴岡の絹ー松ヶ岡開墾場から現在までー」

田中 尹さん（元鶴岡織物工業協同組合理事長・元松岡蚕種(株)社長）

基調報告 「鶴岡まちなかキネマー木造絹織物工場を映画館にー」

高谷 時彦さん（東北公益文科大学大学院特任教授）

12:10~13:10 昼食

13:10~15:10 事例報告：地域の絹遺産と活用・これから

報告者（参加依頼）：鶴岡市・新庄市・福島市・千曲市・川越市・小川町・日野市・横浜市・前橋市  
他

コメンテーター：参加講師・星 和彦（RAC理事長・前橋工科大学長）・米山淳一

コーディネーター・事例報告総括：後藤 治（工学院大学理事長・RAC理事）

15:10~15:20 閉会 星 和彦



# 歴史まちづくりの取組を通じた地域活性化

国土交通省 都市局  
公園緑地・景観課 景観・歴史文化環境整備室  
課長補佐 富所 弘充



Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism

## 歴史的風致が失われる現状



- 我が国には、城郭や神社仏閣等の文化財及び文化財指定を受けていないものの歴史的な価値を有する建築物とが相まって、歴史的なまちなみが形成されている地域が全国に存在している。
- こうした地域において、工業品の製造販売や祭礼行事などが行われ、歴史的なまちなみと一体となって、風情・情緒、たまたまの良き市街地の環境(歴史的風致)が形成されている。

文化財指定されている歴史的建造物は適切な保存・活用がなされている一方、それ以外の歴史的建造物については、維持管理に多くの費用がかかること、所有者の高齢化等を背景に減失が進んでおり、良好な歴史的風致が失われつつある。

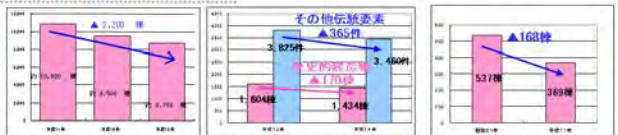


図1 金沢市のまちなかの例  
①期間：昭和30年代(全棟)の約30%の歴史的な建造物の失われている。  
②出典：金沢市史(昭和49)

図2 萩市旧城下町地区の例  
①期間：昭和30年代(約10.6%)の歴史的な建造物の失われ、その後の急激な減少(昭和47年：3,069棟(約70%)の失われている。出典：九州大学大学院工学研究科環境計画部門(2016)

図3 台東区の例  
①期間：昭和30年代(約21.3%)の住宅(店舗兼住宅)などの建物の減少が認められている。  
②出典：東京都庁(2014)

## 歴史まちづくり法の概要



「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」(H20.5.23国会一致で成立、同年11.4施行)

- 【法の目的】歴史的風致の維持・向上を図るためのまちづくりを推進する地域の取組を国が積極的に支援することにより、個性豊かな地域社会の実現を図り、都市の健全な発展・文化の向上に寄与
- 【歴史的風致】地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境



## 歴史まちづくり計画のイメージ



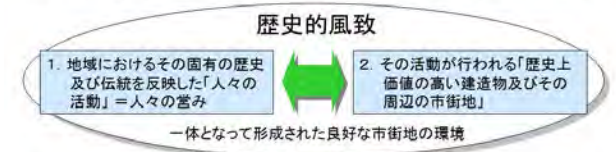
- 歴史・文化を活かしたまちづくりを進めるため、核となる国指定文化財とそれと一体となって歴史的風致を形成する周辺市街地を重点区域に設定。
- 景観施策とも連携しながら、計画期間(概ね5～10年)中のハード・ソフト両面の取組を位置付け。



## 「歴史的風致」とは



- 法律における定義(歴史まちづくり法第1条)  
「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」

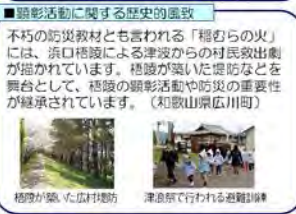


三町重要伝統的建造物群保存地区と高山城(岐阜県高山市)



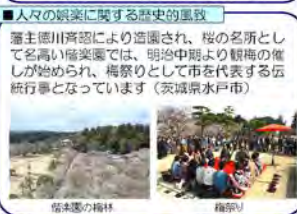
■生業に関する歴史的風致

古くから綿織物産業で栄え、近世以降、一大機業としての地位を確立した柳生は、今もなお、ノコギリ屋根工場などの歴史的建造物で綿生織物の生産が続けられ、機音を響かせています（群馬県柳生市）



■人々の生活に関する歴史的風致

藩政時代以前に開削され、小幡城下の歴史的町並みの中を流れる埴川運は、住民の日常生活に利用されています。（群馬県甘楽町）



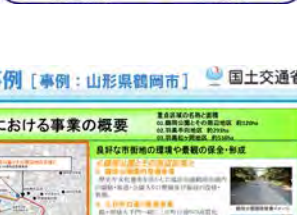
■観光活動に関する歴史的風致

不朽の防災教材とも称される「稲むらの火」には、浜口梧枝による津波からの村民救済劇が描かれています。稲鼓が築いた堤防などを舞台として、稲鼓の観光活動や防災の重要性が継承されています。（和歌山県広川町）



■人々の娯楽に関する歴史的風致

藩主徳川齊昭により造園され、桜の名所として名高い箱楽園では、明治中期より観劇の催しが始められ、梅祭りとして市を代表する伝統行事となっています（茨城県水戸市）



**鶴岡市の維持及び向上すべき歴史的風致**

①旧内藤主税邸跡と城内大衆館跡の歴史的風致  
②藩校鶴岡の敷地と校舎跡の歴史的風致  
③鶴岡天満宮と天満宮跡の歴史的風致  
④七軒町観音堂跡と跡地の歴史的風致  
⑤鶴岡の醸造業と醸造工場跡の歴史的風致

**鶴岡市の重点区域における事業の概要**

① 歴史的建造物の保存・修繕及び活用  
② 歴史的風致の調査と調査及び調査  
③ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
④ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
⑤ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
⑥ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
⑦ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
⑧ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
⑨ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
⑩ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
⑪ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
⑫ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
⑬ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
⑭ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
⑮ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
⑯ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
⑰ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
⑱ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
⑲ 歴史的風致の調査と調査及び調査  
⑳ 歴史的風致の調査と調査及び調査

〇市町村は、歴史的風致の維持向上について専門的知識や実績等を有するNPO法人等を、その申請により、歴史的風致維持向上支援法人として指定することができる。

〇歴史的風致維持向上支援法人に指定されると、歴史的風致維持向上施設の整備及び管理、歴史的風致形成建造物の所有者に対する助言等の援助、歴史的風致維持向上協議会への参画等が可能となり、民間活力を活用した歴史的風致の維持向上を図ることができる。

■指定実績（平成30年5月末現在）  
4市（鞍馬市、本室町市、白河市、川崎市）で5法人を指定

■歴史的風致維持向上支援法人の取組事例（鞍馬市）  
特定非営利活動法人取まじゅう博物館を指定し（H21.4.1）、収容博物館の館内ガイド、薪木のしり博士・こどもものしり博士検定、歴史的建造物の修理等、様々な取組を推進。

〇市町村は、歴史的風致維持向上計画の作成・変更に関する協議、実施に係る連絡調整を行うための協議会を組織できる。

〇協議会は、歴史的風致維持向上施設の整備事業等の実施主体、歴史的風致維持向上支援法人、都道府県、重要文化財建造物の所有者、学識経験者等から組織される。

〇現在、全ての認定都市で協議会が組織され、少なくとも年1回は会議が開催され、計画の進捗状況や効果、今後の対応方針等に関する議論がなされ、計画の実施等に反映されている。

■法定協議会の事例（滋賀県彦根市）

協議会組織	協議会委員	河原町町内地区は、彦根市で初めて重要伝統的建造物群保存地区に指定されたことから、積極的に活用する必要がある。
滋賀大学名誉教授(古本)	岐阜県区自治体自治会	立花池町跡地町交差点周辺風景小築修繕事業の周辺で確認された遺構について、活用するとなっているが、修繕費の確保が課題であり、見える化による活用も考える必要がある。
岐阜女子大学名誉教授(国原)	岐阜市連合自治会	七曲川におけるまちづくり計画策定について、住民の意向は、まだ小さいが、これらによって、市のかかわりを求める。
関係団体	行政機関	七曲川や丹波橋二丁目自治会のように、都府県、市町村、住民の意見を実施するには相当時間を要するものである。例えば、自治会の一部を整理してモデル地区を作り、それを住民に見てもらい、気運を盛り上げていくのが実現に向け、最も現実的な方法である。
彦根商工支援所	滋賀県土木交通部	
彦根商店街連合	滋賀県教育委員会	
公益社団法人彦根観光協会	彦根市	
NPO法人彦根観光フォーラム	彦根市土木事務所	
NPO法人五保生活	彦根市	

法定協議会のメンバー(430名程度)

法定協議会(H20.2.2)における主な意見

①社会資本整備総合交付金(街なみ環境整備事業)  
〇公共施設の整備や修繕施設の整備、電線の地中化等、良好な街なみの維持・再生を支援  
〇歴史的風致形成建造物の買取・移設、修理・復原を補助対象に追加

②社会資本整備総合交付金(都市公園等事業)  
〇地域活性化の核となる貴重な歴史資産の保存・活用に関する都市公園の整備を支援  
〇古墳、城跡等の遺跡やこれらを復元したもので歴史上価値の高いものを補助対象に追加

③社会資本整備総合交付金(都市再生整備計画事業)  
〇地域の歴史・文化等の特性を活かした個性あふれるまちづくりを総合的に支援  
〇交付金の上限を40%~45%へ上げ、土土・遊歩道の整備を基幹事業に追加

④歴史的風致活用国際観光支援事業  
〇広域観光周遊ルート形成する歴史まち計画認定都市における受入環境整備を総合的に支援  
〇案内板等の多言語化、体験プログラム開発、観光案内所等の機能向上などが補助対象

〇住環境の整備改善を必要とする区域において、地区施設、住宅及び生活環境施設の整備等、住環境の整備改善を行う地方公共団体等を支援。

〇歴史的風致維持向上計画の認定都市では、歴史的風致形成建造物の修理、買取り、移設、復原が支援対象を追加(国費率:市町村等1/2、民間事業者等1/3(間接補助))  
※間接補助の場合は、10年以上の一般公開を行うことが条件となる。

広島県竹原市においては、江戸末期に建てられた酒蔵(藤井酒造)を歴史的風致形成建造物に指定し、保存修繕を実施した。  
※藤井酒造は、竹原市竹原地区伝統的建造物群保存地区に隣接

〇地域の歴史・文化遺産を保全・活用したまちづくりを推進するため、地域活性化の核となる貴重な歴史資産の保存・活用に関する都市公園の整備を支援。

〇歴史的風致維持向上計画の認定都市では、古墳、城跡、旧宅その他の遺跡及びこれらを復元したもので歴史上又は学術上価値の高いものを支援対象に追加(国費率:1/2)

石川県金沢市においては、石川門の保存修理、河北門と橋爪門の復元により、明治期に焼失して以来134年ぶりに金沢城三御門が往時の姿を取り戻している。







長浜まちづくり会社的事例(滋賀県長浜市)

○シェアハウス網市

一般的な家族住まいには規模が大きく、住まい手が見つからなかった町家について、まちづくり会社が主体となり、現代的なライフスタイルに合わせたシェアハウス「網市」を整備し、賃貸を行っている。



シェアハウス外観



シェアスペース(キッチン)

○安藤家

まちづくり会社が、空き家となっていた歴史的建造物を所有者から借り受け、公開事業として活用している。



安藤家外観



庭園

Kiraku Japan による古民家活用の取組(宮崎県日南市)

- ・日南市では、鉄肥地区の歴史的風致を保存しながら空き家の活用を図るため、鉄肥地区まちなみ再生コーディネーターを全国公募
- ・まちなみ再生コーディネーターが中心となり、Kiraku Japan を事業主体として、歴史的建造物である「耕田邸」「合屋邸」の2棟を改修し、貸し切り宿泊施設「季楽 鉄肥」として活用。
- ・事業に当たっては、観光活性化マザーファンド、宮崎銀行、行政の3者による協賛支援により、投資資金を調達。



耕田邸

○歴史まちmeetingの充足(山形県鶴岡市)

- ・歴史まちなか市民ワークショップを機に、旧鶴岡ホテルを会場としたイベントを開催(200名の参加)
- ・平成27年6月には歴史まちづくりを市民の手で、より広げていくことを目的に、ボランティア団体として歴史まちmeetingを立ち上げ、歴史的建造物の一般公開等を実施している。



旧鶴岡ホテルでのイベント

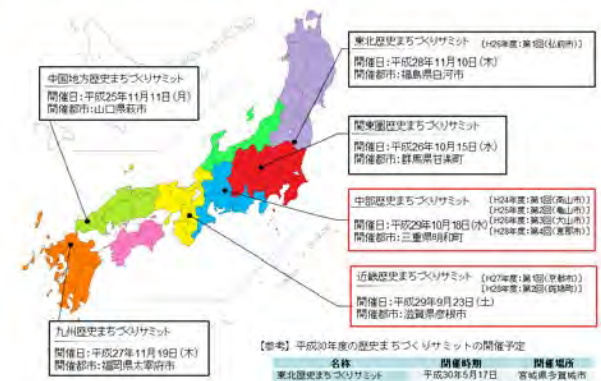
○大学と連携した雄川堰の保全(群馬県甘楽町)

・耕田に張り巡らされている雄川堰の小堰について、日本大学の構造・デザイン研究室と連携したワークショップや改修現場の見学会を定期的に開催し、地域住民の関心が高まっている。



ワークショップ

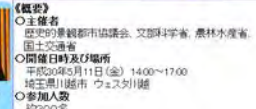
雄川堰(小堰)



- 平成30年5月11日、埼玉県川越市において歴史的景観都市協議会、文部科学省、農林水産省、国土交通省の主催により、「歴史まちづくり法10周年記念シンポジウム～地域の魅力向上と、次世代への継承～」を開催。
- 法制定・施行10周年を契機に、全国的な歴史まちづくりの機運醸成を図るため開催した本シンポジウムでは、全国8都市の市長による「歴史まちづくりの取組の概要とその成果」等をテーマとしたパネルディスカッション、都市間の連携による歴史まちづくりの推進に向けて歴史まちづくり取組む77都市による共同宣言を実施。



8都市の市長によるパネルディスカッション



西村孝夫氏の基調講演



共同宣言 (歴史的景観都市協議会加盟都市・歴史的風致維持向上計画認定都市(77都市))



各都市の歴史まちづくり取組の紹介展示

- 歴史まち認定都市の象徴的な風景写真や歴史まちづくり情報を紹介したカード型パンフレット
- 中部地方において歴史まちづくりに積極的に取り組む13都市と中部地方整備局が連携し、歴史まち認定都市の魅力を紹介するため、全国に先駆け作成
- H29.10から中部の認定都市の指定スポットにて配布



○行政間の連携



認定都市担当者会議

○専門家、住民、事業者、市民団体等の連携



第40回全国町並みゼミ

○歴史まち情報サイト(H27.7開設)





## 1. 庄内藩の城下町 鶴岡

### (1) 庄内藩と戊辰戦争

- |            |  |
|------------|--|
| 1622（元和8）年 | ・徳川四天王の酒井忠次の孫、酒井忠勝が入部。以降、1871（明治4）年の廃藩置県まで酒井家が治める  |
| 1805（文化2）年 | ・藩校致道館創設。1816（文化13）年、鶴ヶ岡城三の丸内の現在地に移る   |
| 1863（文久3）年 | ・庄内藩が江戸市中取締役に  |
| 1868（慶應4）年 | ・鳥羽・伏見の戦い<br>・庄内藩が「奥羽越列藩同盟」に参加<br>・庄内藩主酒井家13代酒井忠篤が新政府軍黒田清隆に謝罪降伏（会津藩謝罪降伏の3日後）。処分は鶴ヶ岡城の開場、武器の返納、藩主の城外謹慎と驚くほど寛大 |

### (2) 西郷隆盛と菅実秀「徳の交わり」

#### ●庄内藩への寛大な処分は西郷隆盛の指示であることを庄内藩家老の菅実秀が知る

- |            |   |
|------------|---|
| 1870（明治3）年 | ・酒井忠篤と旧藩士70人が鹿児島を訪れ西郷に学ぶ  |
| 1871（明治4）年 | ・菅と西郷が始めて対面。2人の交流が始まる。<br>「一見して果して此の人なりと、交情、日々に厚く、夫子（実秀）の翁（西郷）を敬する兄の如く、翁の夫子を親しむ弟の如し」『臥牛先生行状記』 |

#### ●菅が藩士に開墾させ絹産業を盛んにすることを相談し西郷は賛成する

- |             |                             |
|-------------|-----------------------------|
| 1877（明治10）年 | ・西南戦争                       |
| 1889（明治22）年 | ・庄内の人々が西郷の精神を伝えようと『南洲翁遺訓』編纂 |

## 2. 松ヶ岡開墾

### (1) 刀を鋤に替えたサムライたち

#### ●廃藩置県・身分制度廃止などで庄内藩は大泉県に。旧庄内藩士の生活が困窮

#### ●日本の一番の輸出品は生糸。絹産業を盛んにすることで社会に貢献し、地域や国の発展に貢献しようと松ヶ岡開墾が始まる

- |            |   |
|------------|---|
| 1872（明治5）年 | ・旧庄内藩の家臣約3,000人が後田山（現在の松ヶ岡）を開墾。8月から10月までの58日間で106ヘクタールを開墾 |
| 1873（明治6）年 | ・蚕に与える桑の栽培が開始   |
| 1874（明治7）年 | ・高寺山、馬渡山、黒川山など205ヘクタールを開墾                                 |

### (2) 日本最大の蚕室群が完成

#### ●日本一の開墾事業を目指す

- |             |  |
|-------------|--|
| 1874（明治7）年  | ・群馬県島村の日本一の養蚕家・田島武平、田島弥平に派遣されていた開墾士が帰郷。蚕室の建設が始まる |
| 1875（明治8）年  | ・蚕室4棟建設。蚕室の設備や蚕具の準備が整い養蚕が本格化。蚕種の輸出開始             |
| 1876（明治9）年  | ・蚕室4棟建設  |
| 1877（明治10）年 | ・蚕室2棟建設<br>・10棟の大蚕室群が完成（島村の約2倍の規模）               |
| 1926（大正15）年 | ・開墾場の創業55年に『松ヶ岡開墾場綱領』が作られる                       |

### (3) 天皇皇后の御巡幸

- |                |                               |
|----------------|-------------------------------|
| 1881 (明治 14) 年 | ・明治天皇のご名代・北白川宮能久親王が松ヶ岡開墾場にご来場 |
| 1947 (昭和 22) 年 | ・昭和天皇が松ヶ岡開墾場をご視察              |
| 1950 (昭和 25) 年 | ・貞明皇后が松ヶ岡開墾場等をご視察             |
| 2016 (平成 28) 年 | ・天皇皇后両陛下が松ヶ岡開墾場をご視察           |

### 3. シルクのまち 鶴岡

- |                |   |
|----------------|---|
| 1887 (明治 20) 年 | ・松岡製糸所 (松岡株の前身) が創設                                     |
|                | ・富岡製糸場に女性工員を派遣  |
| 1917 (大正 6) 年  | ・風間銀行 (荘内銀行の前身) 設立                                      |
| 明治 30 年~40 年代  | ・海外輸出向けの絹織物、羽二重の生産量が伸び、絹織物業が飛躍的に発展                      |
|                | ・斎藤外市が「斎外式力織機」を発明。絹織物の生産技術向上、機械生産等の鉄工業の発展など鶴岡の産業拡大につながる |
|                | ・人材育成のため、鶴岡染織学校 (鶴岡工業高等学校の前身)、鶴岡裁縫学校 (鶴岡中央高等学校の前身) が設立  |
| 大正時代           | ・主力生産品が羽二重から縺子に移る                                       |
|                | ・第一次世界大戦後、鶴岡の絹産業が最盛期を迎える                                |
| 昭和 20 年代~30 年代 | ・第二次世界大戦後、鶴岡の絹産業が最盛期を迎える                                |
| 2007 (平成 19) 年 | ・新たなブランド「kibiso」誕生                                      |
| 2012 (平成 24) 年 | ・鶴岡シルクタウン推進プラン 策定                                       |
| 2017 (平成 29) 年 | ・「サムライゆかりのシルク」が日本遺産に認定                                  |

## 鶴岡シルクの伝統を未来へ —鶴岡シルクタウン・プロジェクト—

奥山真裕 (鶴岡市政策企画課)

### ■鶴岡の絹産業の特徴

絹織物一貫生産工程が日本に唯一残っている地域であることが特徴の1つです。現在、庄内地域の養蚕農家は1戸ですが、養蚕業に興味があり取り組もうと考えている方々が数人います。「製糸」は旧松山町 (現在の酒田市) にある松岡株式会社が行っています。全国でも大規模で製糸を行っているのは群馬県の碓氷製糸協同組合と松岡株式会社の2箇所のみで、世界遺産の絹産業遺産群の一つ富岡製糸場にある操糸機械が実際に稼働しています。糸を織り布にする「製織」は、京都の和装と違い本市では洋装広巾です。「精練」は羽前絹練株式会社が行っています。国内に大規模な絹の精練工場がないため、全国から精練するための生地が集まっています。イスラム圏の女性向けベールや最先端の工業製品向けの絹織物を加工しています。布に色を染める「捺染」は2社が行っています。東福産業株式会社は多品種小ロット生産で多様なニーズに対応しています。また有限会社芳村捺染には横浜スカーフの技術が受け継がれ

もう一つの特徴は、全国における絹織り産地と呼ばれる中で一番の北限の地にあることです。明治以降の絹織産地で歴史的に比較的浅い産地ですが、「kibiso」プロジェクトという新たなチャレンジに取り組んでいます。

鶴岡の絹産業が発展には、明治33年に斎藤外市が発明した電動式の「斎外式力織機」が大きく影響しています。国内の絹織産地に普及するとともに、鶴岡の絹織物の生産技術の向上や鉄工業の発展などにつながりました。

### ■鶴岡シルクタウン・プロジェクトの活動

鶴岡シルクタウン・プロジェクトは①鶴岡シルクを生産・販売振興、②歴史的風致維持向上計画に基づく史跡松ヶ岡開墾場等の整備、③日本遺産「サムライゆかりのシルク」事業の推進の3つの柱で構成され、民間事業者や市民の皆様の協力を得ながら、鶴岡市の近代化の礎となった絹織産業の文化を後世に保存継承し、新たな絹織文化の創造・展開を目指しています。

## ①ものづくり・ひとづくり・普及啓発

### ◎ひとづくり…養蚕再興（鶴岡市養蚕環境整備実証事業）

産業化に向けた養蚕実現を目標に、複合経営の一環としての養蚕が確立できるかを実証する事業。飼育舎に廃校の一部を活用、桑園の整備、松ヶ岡開墾場に残る昔の蚕具の再利用などに取り組みます。

### ◎ものづくり…鶴岡シルク産業の振興（「kibiso」振興）

蚕が繭を作るときに最初に吐き出す糸「きびそ」に着目し新しく開発した素材が「kibiso」です。鶴岡のシルクと産業を次世代につないでいくため、「kibiso」のオンリーワン製品を、国内の精鋭デザイナーなど各分野のプロとともに制作し、「kibiso」ブランドとして国内外に発信しています。

### ◎普及啓発…蚕飼育体験・シルクガールズプロジェクト

○蚕飼育体験…絹文化に触れる機会を提供するため、幼稚園・保育園・小学校、福祉施設、市民（繭人）に「蚕の飼育キット」を配布。29年度は、48の施設、約1,000名の幼児、児童が蚕飼育を体験しました。



○シルクガールズプロジェクト…鶴岡中央高校

の総合学科家政科学系列被服系生徒が結成するプロジェクトです。「地域を元気にする」活動として鶴岡シルクに着目し平成22年から活動開始しました。

## ②史跡松ヶ岡開墾場等の整備

### ◎史跡松ヶ岡開墾場保存活用計画の策定

日本開拓史上極めて重要であることから史跡に指定されている松ヶ岡開墾場の文化財的価値を将来にわたって継続するため、同計画を策定し史跡として安定的に保存、修繕、整備するとともに活用を図り、松ヶ岡地域さらに本市の活性化につなげます。

## ③日本遺産魅力発信推進事業の展開

### ◎「サムライゆかりのシルク 日本近代化の原風景に会おうまち鶴岡へ」

松ヶ岡開墾から今日に至る鶴岡の絹に関わる歴史的な価値や魅力が認められ、平成29年4月に日本遺産に認定されました。日本遺産の魅力を地域内外に情報発信し、交流人口の拡大と地域活性化を図ります。

○情報発信・人材育成

映像制作、のぼり・ホームページ・リーフレット・製作、観光ガイド養成

○普及啓発

小冊子・展示パネル製作、平成冬夜読書会、南洲翁臥牛翁遺徳顕彰交流事業、誘客戦略旅行商品開発等

○調査研究

地域資源潜在力調査

○公開活用の整備

情報発信施設の整備、サムライゆかりのシルク蚕室展示等



# 木造絹織物工場を映画館に一産業文化遺産で映画を楽しむまち鶴岡一

高谷 時彦（東北公益文科大学大学院特任教授/設計計画高谷時彦事務所）

2002年にシネマ旭が無くなって以来、8年間鶴岡のまちの中には映画館がありませんでした。2010年に古い木造絹織物工場である松文産業鶴岡工場跡地を再生活用したまちなかキネマが誕生し、鶴岡は、産業文化遺産で映画を楽しむことができるまちとなりました。

## 1. 松文産業旧鶴岡工場の歴史と計画の経緯

### (1) 松文産業旧鶴岡工場の移転

松文産業は高級婦人服フォーマルウェアでは最大シェアをもつ合長繊維業界のトップ企業です。明治23年、福井県勝山町で設立された石上機業場を、大正2年に横浜の生糸商松村文四郎が引き継ぎ、松文機業場としてスタートしています。松村文四郎商店は横浜の海岸通りに店を構えていました。

松文産業鶴岡工場は昭和7年に遊休化していた大泉機業場を買収し、従業員72名、織機64台の絹織物工場として操業を開始しました。他の企業が戦争前後に次々と絹織物から撤退する中で、1970年までは絹織物業を継続していました（男網末松1969）。

### (2) 商工会議所による跡地利用構想と開発スキームの提示

1970年から郊外工場への移行を進めていましたが2006年には2年後に完全移転することが最終決定されました。相談を受けた、商工会議所副会頭（のちに荘内銀行頭取）はまとまった遊休地（3000坪）の発生は中心市街地を構造的に変えていく大きなチャンスだと捉え、「居住と文化・商業・飲食の融合による、新たな都市機能の創造と、山王商店街とのコラボレーションによる」（計画スキームづくりのための打ち合わせメモより、2006.8）中心都市の再生計画案を提示します。

### (3) 産業文化遺産の活用を通じた地域再生

当時の外観や内部は右写真のような状況でした。かなり痛みが激しい。また建築基準法を普通に読みますと60坪を越える興行場は木造建築ではできませんので、通常は無理と考えます。当然壊すことを前提に私たちは相談を受けました。

しかし一番腐朽が進んでいた棟（B,C棟）がどうしても気になって工場長に操業中のB棟の天井をはがしてもらいました。するとなんと立派な地元産材による木造トラスが現れたのです（右下写真）。ついでにC棟も見せてもらおうと、そこには、あとでお話する2種類のトラス構造があったのです。これは、貴重な産業遺産であると直感しました。

私たちは、この古い木造工場を残すことを提案しました。副会頭は歴史文化が鶴岡の中心部再生のカギになるというお考えをお持ちでしたので、熟慮の後、この案にゴーサインが出されたのです。





## 2. 木造絹織物棟 (B, C 棟) を映画館にする—まちなかキネマ計画—

### (1) 第一期計画としてのB、C棟

2009年5月に県の許可(住居系の用途地域に映画館を建てるための建築基準法に基づく許可)を頂きました。当初は南側の鉄骨工場(多目的ホールなど)も含めた計画でしたが、事業性を鑑みて映画館部分を1期とすることが決定。まちなかキネマ計画は建築的にはB、C棟のコンバージョンということになります。

計画づくりに平行して歴史調査も進めました。創業20周年を記念してまとめられた記録「工場の歩み」(長岡1952)の中に建設年を記入した色塗り図面と工場建設の歴史がまとめられています。それと現場を対照することで、B、C棟については建築年を知ることが出来ます(右上写真)。一番古いのが、C棟の東側で昭和7年以前となります。既設部分は小屋組みが対束トラス(クイーンポスト)であり、他の部分とはっきり異なっています。その後昭和8年、9年、10年~11年と増築されています。昭和初期の大不況を脱し、戦争前に一時輸出絹織物産業が好況を迎えますがその時期にあたります(右写真は火災消失棟)。

B、C棟は昭和7年の創業以来戦後1970年前後に絹織物から撤退するまで一貫して織物工場として使用されてきた部分であることが分かりました。戦時中に軍の要請で羽二重を織っていた以外は輸出用高級絹・人絹を織っていました。70年以降は合成繊維の燃糸工程が置かれていました。

### (2) 構造形式

#### ①基礎及び軸部、壁

#### ②小屋組み

主要部材は杉材が用いられています。梁間方向に6間(B棟は1,880×6スパン、C棟は1,820×6スパン)という長スパンです。対束トラスの部分では、中央部で継ぎ手が施されており、腰掛鎌継に4.5t×120wのフラットバーで挟み込むように補強されています。この継ぎ手部分で13φの棒鋼で吊っています。

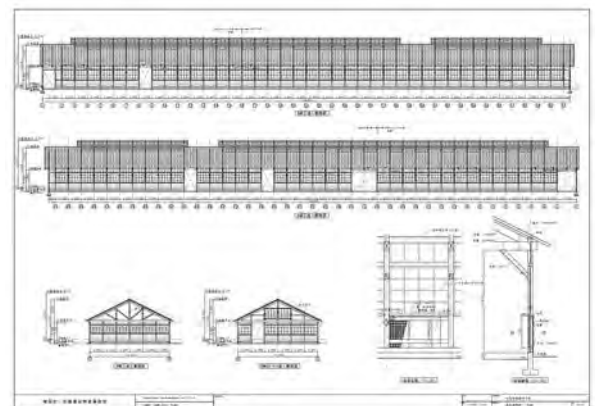
これに対し建物の大半を占める真束トラス構造部分では、陸梁(150×240)は一本ものとなっています(図-38、39、40)。トラスと柱の取り合い部分は陸梁が直接柱の上に乗せられ(折り置き組)重ね臍で軒桁(鼻母屋)と接合されています(右上写真)。

大断面構造をつくる方法としては大正期からすでに鉄骨も多用されています。しかし、この地域では大架構をつくる方法として木造トラスは普通に採用されていたものと思われます。

#### ③屋根・越屋根

昭和27年の「工場の歩み」に添付されたパース(長岡正士1952)によると越し屋根にはトップライトが描かれていますが、形状、使われ方などは今後調査が必要です。

以上の調査を踏まえ、創建当時の復原した図面を作成しました(右下写真)。



## 4. 計画とデザイン

### (1) 改修の方針—何を継承すべきか—

昭和初期に建設されて以来、使い勝手に応じて、多くの変更が加えられていますが、変わっていないものもあります。それは架構のシステムです。工場としてのいろいろな使い方に耐えるしなやかな容器としての架構システムこそ松文鶴岡工場が一番重要な継承すべき価値だと思います。このあたりは後藤治先生の御指導もいただきました。

### (2) 計画の考え方

- ①安全性の確保、合理的な構造補強
- ②分棟化による防火、避難の独立性の確保
- ③地下方向への空間の拡大

私たちはビジネスの広がりやを制約したくないと考え、高さ2.6mから3m程度の十分な画面サイズを確保したいと考えました。梁下の高さ確保のため床を掘り込むこととしています。構造的、施工的には難しいものとなりましたが、地下方向に空間、気積を拡大したことで、日常空間とは少し空間体験の質を変えることができたように思っています。木造架構の利用可能性を拡大したものではないかと考えています（右下写真）。

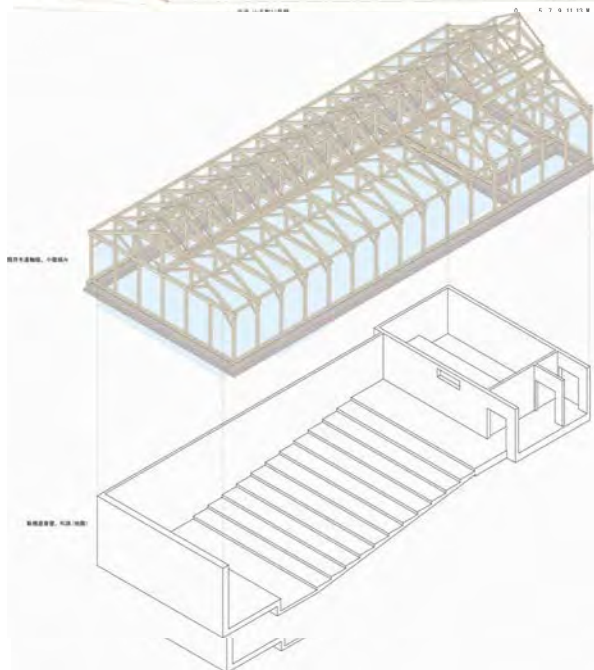
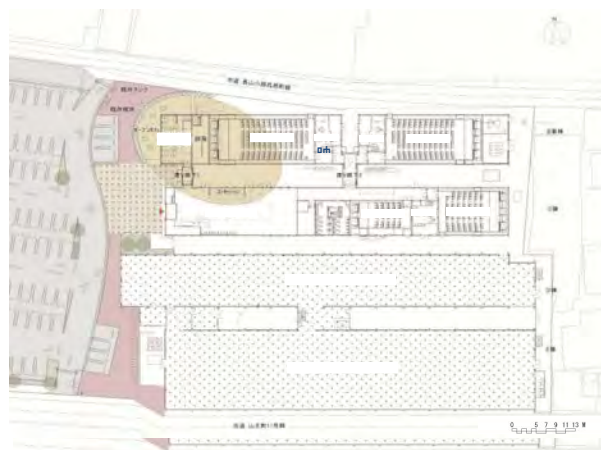
### (3) デザイン方針

- ①内外観の継承: 架構システムを活かして工場らしさ再創造すること。芭蕉も歩いた長山小路の落ち着いた雰囲気や溶け込み地域の歴史を私たちに語りかけていた風景を継承すること。
- ②デザインのテーマ: 地域の産業をリードしてきた絹織物（織機、織機、箆、繭）をモチーフとしたデザイン。
- ③キネマ: 壁の木製格子は絹の機織機をイメージしました。細かい格子は織り機にかけられた糸や櫛の箆を表現しています（右写真）。椅子にも絹のイメージが継承されています。一般的なシネコンで用いられるようなプラスチック製の背板ではなく、木の生地を生かし、絹の布地のようにしなやかな曲線を描くようにしました。

またスクリーンの手前には小ステージを設け監督や出演者の舞台挨拶や映画談議など鑑賞者がより多様に映画を楽しむためのイベントを行えるようにしています。

- ④エントランスホール: 上部トップライトからやわらかく光を導きいれダイナミックな小屋組みを照らし出すようにしました。床は固い栗のフローリング、壁は旧工場時代と同様に杉堅羽目貼りとし、木に包まれた親しみやすい雰囲気としています。この広々と明るいアトリウムのような空間の中にミニコンサートや展示などの出来る多目的のコーナーや旧松文産業鶴岡工場のメモリアルコーナーも設置し、「シネコン」とは違う、市民の活動スペースをかねた一味違うホワイエとなっています（次頁右上写真）。

- ⑤外回り: トタン板で覆われていた外観は、防火性能を確保した上で杉の下見板張りに復元し、昭和前期の風景を再現しました。オイルタンクや煙突なども継承すべき工場風景のひとつと考え、壊さずにおいておくこととしました。エントランスに向かう床面のパターンは、かつて生産していた羽二重の織物パターンに対応しています。また、床に用いられている曲線をつなげていくと、大きな繭のかたちになっていることに気づくことと思います。同様に駐車場の料金清算機など





の黄色が通常見慣れているものと違い、黄蘭の色となっていることに気づく方もいらっしゃるでしょう(右下写真)。

## 終わりに

ヨーロッパ都市と違い、中心部に行ってもその都市の歴史が建築など目に見える形で実感できないことが日本の地方都市中心部再生がなかなか進まない一因ではないでしょうか。戦災を良い機会として一気に「近代化」を進めた国と、地道に元の姿を再建した国の違いです。

幸い、鶴岡は戦災で一気に中心部の姿が変わることはありませんでした。手がかりはたくさん残っています。地域を牽引してきた絹織物産業を目に見えるかたちで継承していくことが地域アイデンティティの確認に繋がるはずです。映画館となっている部分は準備工場ではなくまさに織物を実際に作っていた場所です。またシルクを通したまちづくりを進め、今なお鶴岡人の誇り(絹織物用力織機の発明者は鶴岡出身の齊藤外市)である絹織物の工場が中心部再生のシンボルとなることの意味は大きいと思います。また、いうまでもありませんが地球環境にやさしいサステナブルな方法です。

わたしたちは、映画館として魅力があるというだけでなく、地域アイデンティティの形成、ひいては地域の誇りとなる風景と場所を作り出したい、そのような思いでこのプロジェクトに関わってきました。今後は2期計画部分の再生活用にも取り組んでいきたいと考えています。



参考資料：

松文産業OBの山口武氏(大正15生まれ)と北風光男氏(昭和11生まれ)からのヒヤリング。松文産業社長小泉信太郎氏、同鶴岡工場長菅原眞一氏、同総務課長佐藤廣一氏同席。東北公益文科大学公益総合研究所研究員國井美保と筆者でまちキネエントランスホールにて実施(2011年2月15日)。

長岡正士 1952 「工場の歩み」：松文工場の20周年を記念して建築にも造詣が深い氏が手書きでまとめたもの。

男網末松 1969 「鶴岡工場三十五周年に思う」松文産業社内報15、昭和44年8月10日。

## 西郷どんとサムライシルク

大西 孝彦（フリーライター）

「サムライゆかりのシルク 日本近代化の原風景に出会うまち鶴岡へ」が日本遺産に認定された山形県鶴岡市などの庄内地方は、内村鑑三に「最後のサムライ」と評された西郷隆盛とのゆかりもよく知られている。150年前の戊辰戦争での敗北の屈辱を跳ね返すため、広大な森林・荒地を開拓した3000人の士族は、戊辰戦争後の寛大な処遇を機に西郷との交流を深めた。その交流から西郷唯一の思想・信条集「南洲遺訓集」が生まれ、西郷を祀った神社も創建された。巨大な養蚕室で知られる松ヶ岡開墾場も、西郷と二人三脚でスタートしている。

酒田市飯森山にある庄内南洲神社は昭和51年、個人宅に創建された。伊勢神宮の古材が使われている。旧薩摩藩領地以外では国内唯一の南洲神社である。境内に入ると和服姿の二人が向き合う大きな銅像が目につく。一人は西郷隆盛、もう一人は庄内藩の老成で、維新後は地元の政治経済振興をリードした菅実秀。像は二人の「徳の交わり」を象徴したものだ。



写真1 酒田市の庄内南洲神社。左の銅像は「徳の交わり」

### 対決、薩摩藩邸焼き討ち事件

慶応3（1867）年12月25日、江戸薩摩藩邸焼き討ち事件が起きた。三田薩摩藩邸に逃げ込む集団強盗（御用盗）が相次ぎ、ついには庄内藩屯所を銃撃する事件も起こしたため、幕府も、藩邸に隠れた不逞浪士の逮捕に乗り出した。早朝、庄内藩を主力部隊とした総勢2000人が薩摩藩邸と、薩摩支藩の佐土原藩邸を取り囲む。映画「ラストサムライ」の主人公のモデルとされるジュール・ブリュネが砲撃計画を練ったらしい。砲撃と切り込みで藩邸にいた薩摩藩士や浪士数十人が死亡、捕虜になり、30人ほどが品川沖の薩摩藩汽船に逃げた。

御用盗は、徳川慶喜の大政奉還によって、武力討幕の理由がなくなったため、焦った西郷隆盛が、武力衝突へと幕府を挑発するため浪士に命じた謀略という解釈が多い。西郷自身は、かく乱工作の見合わせを指示する手紙を部下に送らせたが、浪士に無視されたのかもしれない。いずれにしてもこの事件で、関西にいる幕府軍がいきり立ち、鳥羽伏見の戦いのきっかけになった。

焼き討ち事件の2週間前の12月11日には、庄内藩側用人兼江戸留守居役だった菅実秀は、6人の同行者と京都へ向かった。幕府有力者の小栗上野介忠順に命じられた。菅の同行者の家族によると、使命は武力討幕派幹部の暗殺。西郷隆盛を倒せということだが、事実かどうか、他に確証はない。大阪着が12月28日。4日後には鳥羽伏見の戦いが始まり、菅らに暗殺計画を練るゆとりはなく、早々に断念したようだ。

大事件だけに、菅は大阪城などで鳥羽伏見の戦いの様子を聞いて回った。「関東方（旧幕府軍）はいつも京都方（薩長軍）に機先を制されている。これは京都方によほどすぐれた人物がいるからにちがいない」と思ったらしい。「すぐれた人物」の姿はわからないが、畏敬すべき人物の存在を感じ取っていたという。

### 常勝庄内藩の降伏、西郷の寛大な処置

戊辰戦争で庄内藩は、新政府軍からの攻撃で奥羽越列藩同盟に加わる。酒田の豪商本間家の経済力もあって優秀な武器を入手できたこともあり、薩長軍や秋田藩、新庄藩相手の戦いはほぼ負け知らずだった。しかし、仙台、米沢、会津藩と、同盟軍が次々に降伏、利あらずと明治元（1868）年9月23日、清水で新政府軍の越後口総督府参謀黒田清隆に会い、和平嘆願書を呈示、降伏の意思を伝える。「当初は薩長が、私怨によって朝旨（朝廷の意向）を曲げて攻めてきたと解したから戦ったが、今になって朝旨と明らかになったうえは、抗戦の罪を謝するのが道理」と前庄内藩主酒井忠発が降伏を決



定した。

幕命ではあるが、薩摩藩邸を焼き討ちしたばかりか、果敢に抗戦して新政府軍を苦しめたから、庄内藩では厳罰を覚悟していた。

ところが9月26日に鶴岡に乗り込んだ黒田の処置は意外なほど軽かった。藩主は菩提寺で謹慎、武器を集めて提出すること、国境から兵を引くことなどで済み、敗戦の辱めを受けることはなかった。最終的には17万石を12万石に減封した程度で、領地も再三の陳情によって元通りにおさまった。

西郷は、黒田に一日遅れの9月27日に鶴岡城下に入る。城の受領を見届けたらすぐ出立する予定だったが、黒田から頼まれ、27、28日と鶴岡で二泊した。宿舎は、七日町の内川にかかる神楽橋詰めにあった加茂屋文治という旅籠。新政府軍本営が置かれた致道館に近い。鹿児島出身の作家海音寺潮五郎は、後の陸軍中将高島鞆之助の思い出話として、27日の真夜中にも酒井忠篤が挨拶に訪れたと書き残している。西郷は自分の藩主に対するように丁寧に対応したといい、高島は「どちらが敗者か分からなかった。行き過ぎだ」と苦言したそうだが、実話かどうかの確証は無い。

菅は寛大だった処置に感謝するため、明治2年1月に黒田に会った。そこで初めて西郷隆盛の指示で寛大に処遇されたことを聞かされる。庄内藩士は感激し、西郷を慕うようになった。

## 松ヶ岡開墾場と西郷の支援

明治4年4月、西郷隆盛が勅命により東京に上京、菅実秀はさっそく西郷を訪ねる。

「一見して果して此の人なり」と…。戊辰戦争当初に感じた「すぐれた人物」とは西郷のことだと確信したと言う。二人は意気投合し旧知の如く語り合った。9月までの半年弱の間に菅は、藩士3000人で荒地を開墾し、養蚕事業を興して敗戦の恥辱をはらす開墾計画を練り上げ、西郷に意見を求めた。西郷は大いに喜び、問われるほどにアドバイスしたと言う。

後にこの松ヶ岡開墾事業が、政府内から疑念を突きつけられたこともあった。3000人も士の族団体が団結を保持していることを危険視する大隈重信、井上馨らが干渉してきた。これに対し西郷は、士族事業の模範ともいべき開墾事業なのに、どのような疑念があるのかと大隈らを問い詰め、干渉をはねつけた。

西郷は時に漢詩を送ったり、箴言を揮毫したりで松ヶ岡の開墾士を励ましている。最も有名な言葉は明治7年11月、鹿児島を訪れた二人の願いに応じて揮毫した「気節凌霜天地知」。中国・王磐の詩にあり、どのような困難も、それを凌ぐ強い志があれば、道は開けるという意味合いだ。大自然を相手に苦闘する開墾士が日々唱和するようにと、松ヶ岡の大正15年綱領にこの箴言は織り込まれた。

## 西郷の下野と菅の鹿児島行

酒田の荘内南洲神社と同じ「徳の交わり」像が鹿児島市にある。九州新幹線の終着駅・鹿児島中央駅から徒歩10分弱の住宅地で、高さ120mほどのシラス台地の麓にある西郷公園。西郷隆盛が明治2年7月に買った終の棲家の跡地で、井戸だけが昔のままに残っている。西郷はここから西南戦争へと出陣し、この家から2キロ離れた城山で最後を迎えた。

明治8年5月、この武西郷屋敷に初めて菅実秀が門人7人と訪ねてきた。菅が西郷に会うのは二度目。西郷は明治6年の征韓（遣韓）論争に敗れ下野していた。20日間ほどだったが、二人は熱心に語り合った。何を語り合ったかは知られていないが、最後に西郷は菅に次の漢詩を送った（読み下し）

相逢う夢の如く又 雲の如し  
飛び去り飛び来って 悲み且つ欣ぶ  
一諾半銭 季子に慚ず



写真2 武西郷屋敷の住居の古写真

昼情夜思 君を忘れず

一諾半銭以下は、ひとたび諾せばどんなこともやり遂げる漢の李布を見習おうとしたが、政府を去ることになり、一諾が虚しいものになったという趣旨か。松ヶ岡開墾場を支援するつもりだったが困難になったと謝っている。ただし、西郷は「徳川と庄内を西郷の代わりに守れ」と黒田に依頼している。

これより先の明治3年11月に、東北の戦いから戻り鹿児島にいた西郷を、前藩主の酒井忠篤と76人の元藩士がたずねた、翌年4月まで半年間、兵学修行している。西郷は、懸命に励む忠篤を高く評価したらしく、ドイツ留学を勧め、自らプロイセン学校規則書を取り寄せて忠篤に送るなどの世話をしている。忠篤は明治5年、弟の忠宝は同6年からいずれも明治12年まで、鉄血宰相ビスマルク全盛のドイツで学んでいる。このほか多くの元藩士が西郷の下で指導を受け、ほとんどが松ヶ岡開墾場の幹部になった。西郷が松ヶ岡に及ぼした影響は大きい。

西郷は、西南戦争の明治10年9月24日、城山で没した。庄内からは、私学校で学んでいた伴兼之、榊原政治の2少年が、西郷らの帰郷説得に応じず西郷軍に参加、田原坂などで戦死した。伴の兄、鱸成信は逆に政府軍として熊本で倒れている。

## 遺訓集発行

明治22(1889)年、帝国憲法発布に伴う大赦で、西郷隆盛の賊名が取り除かれ、正三位が追贈されたため、酒井忠篤は西郷の遺訓集発刊を決意する。菅実秀を中心に遺訓を集め、赤沢源弥が筆を取り、発行人を三矢藤太郎として翌年1月に初版を発行、4月に第2刷一千冊を士族6人に命じて全国に配らせた。

この「南洲翁遺訓集」は、西郷隆盛の政治思想や生活信条など、庄内藩士に語った訓話などをまとめたもの。他に頼るものはなく、西郷の思想・信条を知る上では欠かせない書物になっている。



写真3 武西郷屋敷跡と「徳の交わり」像



写真4 庄内南洲神社の徳の交わり像

## 山形県新庄市 旧農林省蚕糸試験場新庄支場（新庄市エコロジーガーデン「原蚕の杜」）

尾上 直樹（新庄市商工観光課クールジャパン新庄推進室）



- 開園時間 午前9時～午後5時
- 入園料 無料
- 休園日 火曜日、年末年始
- 施設情報 〒996-0091 新庄市十日町 6000-1  
電話 0233-29-2122 Mail [ecology-g@ic-net.or.jp](mailto:ecology-g@ic-net.or.jp)

旧農林省蚕糸試験場新庄支場は、昭和9年に「蚕業試験場福島支場新庄出張所」として発足。施設の建設が進められて昭和11年より事業を開始しました。その後、昭和12年に「蚕糸試験場新庄支場」、昭和33年に「蚕糸試験場新庄原蚕種製造所」、昭和43年に「蚕糸試験場新庄原蚕種

試験所」と改称を重ね蚕種の研究や桑の栽培等、戦中から戦後にかけて一貫して蚕糸業の発展に寄与してきました。

この施設は、国の行政改革により昭和58年5月、「蚕糸試験場蚕育部原蚕種第一研究室及び農業生物資源研究所遺伝資源部保存法第二研究室」に改組され、幾度の組織変更の後、「東北農業試験場畑地利用部畑作物栽培生理研究室」を最後の名称として平成12年3月に閉所されました。その後、平成14年2月、新庄市に譲渡され、同年8月から「新庄市エコロジーガーデン」として蚕糸研究の歴史を紹介するとともに、自然環境を学び、交流の場を提供する施設として活用してきました。平成25年3月に庁舎や蚕室、廊下等を含めた建造物10件が登録有形文化財として登録されました。



平成24年度からはじまった手づくり市「キトキトマルシェ」（5月～11月第3日曜日開催）は、今年で7年目を迎え、年間で10,000人を超える来場者でにぎわいます。これら登録文化財を活用した地域おこしの事例として、平成29年3月に「手づくり郷土賞」（国土交通大臣表彰）を受賞しました。

平成30年度からは、旧蚕室毎に順次耐震改修工事が始まり、更なる利活用に向けて動き出しています。

### ■新庄亀綾織

新庄の伝統の絹織物「新庄亀綾織（かめあやおり）」。新庄藩9代藩主戸沢正胤（まさつぐ）が文政13年（1830）に技術者を招き、藩の特産品として奨励したのが始まりです。

明治末期に生産が途絶え「幻の織物」と呼ばれていましたが、昭和60年に新庄亀綾織伝承協会が発足し「紗綾形」「八つ橋織」などの復元に成功。その後も織の復元と伝承活動を続け、現在では20種類以上の折り目模様がある。亀綾織は織り上げてから染色するため、しっとりした風合いと光沢が特徴で気品のある色が美しい織物としておみやげや贈り物にも喜ばれています。



### ■体験工房「機織り長屋」

- 開館時間 午前10時～午後5時
- 休館日 毎週水曜日、年末年始
- 入場料 見学無料
- 体験料 1,000円～
- 施設情報 〒996-0091 新庄市十日町 1509-2  
電話 0233-22-0025



## 山形県新庄市 旧蚕糸試験場新庄支場 第五蚕室の活用及び改修工事について

中村出(株式会社ヤマムラ)

### ■産直まゆの郷

※旧蚕糸試験場全体の概要については新庄市商工観光課作成資料参照

昭和9年に設置され、66年の歴史に幕を閉じた「旧東北農業試験場(旧蚕糸試験場)」跡地の一部(第五蚕室)を活用し、平成14年9月に産直まゆの郷が開設された。その後、15年以上に渡り店舗は活気に溢れ、地元で採れた野菜を農家さん自身が販売する場所として市民に親しまれている。その間、旧蚕糸試験場(現・新庄エコロジーガーデン)内の蚕室、庁舎棟を含む10棟の建物の価値が認められ、国の登録有形文化財となった(平成25年3月)。

### ■第五蚕室 建築概要

第五蚕室は昭和12年11月に竣工している。建築形式は木造2階建て、切妻造鉄板瓦棒葺(棟に換気設備が設けられている)である。小屋組みはクイーンポストトラスで、外壁は下見板(2階窓下端まで)、上部のみ漆喰で仕上げている。外装は建設当初の様子を残しているが、開口部をアルミサッシに変更、エアコン、給湯器等の設備の更新が行われている。

1階内部は、もともと柱と壁で仕切られていた空間に鉄骨補強を施し、広い空間の店舗として活用されている。壁、天井、鉄骨補強は被覆され、床は土間コンクリートで仕上げられている。2階に上がる動線にもなっている廊下部分は木製板張りの壁、木建具等、当初の状態を維持している。

2階内部は、まゆの郷の倉庫として使用され、一部床に構造用合板、壁にブレースが入れられているが、第一蚕室と同様の姿を維持している。

### ■第五蚕室改修工事と今後の活用

15年以上、産直まゆの郷としてまちに開いていた第五蚕室を新庄市の平成30年度事業として耐震改修工事が進められている。現在、第五蚕室は工事のため、産直まゆの郷は第二蚕室を仮設店舗として通常通り営業している。

12月に第五蚕室の耐震改修工事を終え、整備された建物で新たに産直まゆの郷が運営する。

### ■第五蚕室耐震改修工事関係者

□基本設計：工学院大学 □実施設計：白岩建築設計事務所 □設計監理：富士建築設計事務所

□施工：株式会社ヤマムラ

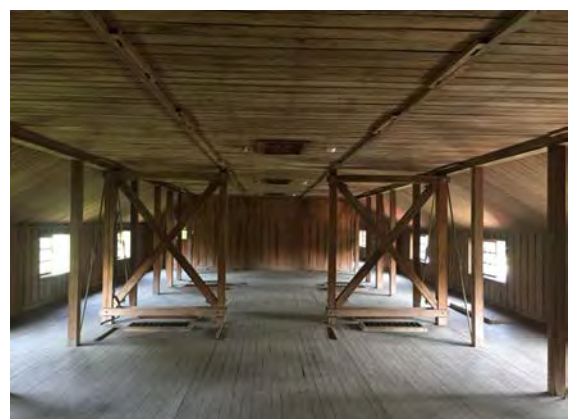
新庄市エコロジーガーデン利用計画策定委員会作成の『新庄市エコロジーガーデン利用計画(案)』によると、「文化財建造物維持管理事業として、活用度の高い第五蚕室、第四蚕室、第一蚕室の耐震改修工事を第1期とし、第二蚕室と本庁舎等の平屋4棟の改修工事を第2期として推進します(P13)」という方向性が示されている。価値が認められ、国登録有形文化財となった旧蚕糸試験場がいよいよ再生、活用され、まちに親しまれる施設となっていくことが期待される。



改修前写真1:第五蚕室(産直まゆの郷)外観



改修前写真2:第五蚕室2階小屋



改修前写真3:第五蚕室2



## 今も残る近代福島の遺産

梅津 司（福島市教育委員会文化課文化財係）

福島市を含む信達地方は、「奥州蚕種本場」として江戸時代から養蚕業が大いに営まれ、福島城下を中心とした福島町（現在の福島市）周辺は、この地方の生糸の集積地として栄え、商工業の発達を見ました。今も姿を残す養蚕業に支えられた近代福島の痕跡を紹介します。

### 養蚕に育まれた工業都市としての福島

全国的に製糸工場が創設される中においても、本地方では明治期半ば以降も品質の高い座繰り製糸が行われ、座繰り製糸と機械製糸が併存する時期が長く続きました。明治後期から大正期以降に製糸業の機械化が本格化し、丸共製糸、山十製糸（のち昭栄製糸）、日本絹燃、鐘淵紡績、福島羽二重、片倉製糸福島蚕種製造所、日東紡績、岩代富国館などの工場が続々と設立されました。現在はほとんどの工場の跡地は他の施設へ転用されていますが、日東紡績の福島工場が製糸・繊維産業で賑わった福島の姿を留めています。また、福島市は現在も製造品出荷額等（平成26年度工業統計調査）において東北第4位の地位を占めています。



・丸共製糸（現・福島県文化センター）



・昭栄製糸（現・イトーヨーカドー福島店）

### 奥羽本線の開業と煉瓦施設

養蚕業を背景とした経済力は、奥羽本線の起点として福島が選定される決定打となりました。板谷越えの鉄道はかつての4駅連続スイッチバックの遺構が残り、現在でも全国屈指の難路です。トンネル等で使う煉瓦を供給するため、市内には煉瓦工場が開設され、昭和41年まで操業していました。工場の跡地には珍しい煉瓦造りの神社が残されています。



・煉瓦造りの山神社



・庭坂駅危険品庫

## 「シルクロード・ネットワーク・ふくしまフォーラム 2017」に参加して

村川友彦（福島市文化財保護審議会委員）

昨年福島市で開催されたシルクロード・ネットワーク・ふくしまフォーラム 2017 では、「福島市信達地方 絹文化をいかしたまちづくり」と題して開催され、福島県の県北地方の養蚕と絹織物を歴史の一端を報告させていただいた。とくに県北地方の伊達市は蚕種と養蚕飼育の技術進歩に力を入れた人物の活躍や、その技術の普及のため養蚕技術書が江戸時代から明治にかけて多く出版されたこと、そのひとつ東北地方の養蚕飼育を温暖育として安定させた画期的発明であった梁川の中村善右衛門による蚕当計および解説書の蚕当計秘訣などについて報告した。また生糸の取引は、伊達市旧伊達町の天王市には関東ほかから生糸の買付が集まり、生糸相場を決定するほどの賑わいをみせ、そして明治期に生糸の集積地となった福島市は、各地から商人が集まり、金融取引の急増から日本銀行出張所が東北で最初に設置されたことなど、信達地方における養蚕・蚕種・機織り・取引の地域的分業化について解説した。

福島市およびその周辺は、養蚕農家や絹に関する建物、それに伴う銀行などが建て替えられ、いずれ消滅することが予想され、少しでも多くが遺産として残ることを念じている。

福島においても養蚕や生糸や絹は、近代社会への発展の基礎となってきたことは間違いありません。そのことを今回のフォーラムの開催によって改めて強く提示できたのではないかと思います。そして今後もその継承に努力し絹の文化が過去の遺物ではなく現在と未来へ繋ぐ手段となることを改めて考えるものであります。

福島市では、福島市周辺の手織りによる織機やその関連道具、「手前織り」といわれた農家の家庭織りの着物調査を実施し、絹に関わる民俗文化財調査の取組みを実施している。

さて、ここでは昨年に報告できなかった福島の養蚕に関する人物（2名）について、この紙面を借り紹介したい。

### 1、節絹織の創始者 仲村熊次郎

万延元年（1860）信夫郡杉妻村黒岩（現福島市黒岩）に生まれた仲村熊次郎は、当時の養蚕家による繭に玉繭が多く生産されることから、比較的安価な玉糸を利用した節絹を考案した。熊次郎の父が安政 5 年（1858）に玉繭から糸をとるための解舒法を研究したことにより、明治 13 年（1870）自家製造の玉繭を平絹の代用として節絹織りを考案し、従来の機織に「ボタン」を応用して軽目節絹織を案出成功した。この節絹を京都へ販路を広げ、年々生産量を増やし明治 41 年（1908）には自家の工女数 600 人、節織上高 8000 疋、村内の年生産高凡そ 2 万疋以上その価格 87000 余円に至った。明治 36 年（1903）7 月 1 日第五回内国勸業博覧会出品節絹織で褒章授与され、同 39 年 5 月 29 日奥羽五県聯合共進会出品節絹織四等賞及び褒章を授与された。（明治期県庁文書『福島市史 11』199 頁）

関東で江戸時代から織られた銘仙は玉糸を緯糸にした太織りであるが、節織は薄い平絹で、羽二重の代用として織物問屋は更紗・絞り・裏地また着尺などで販売された。明治 41 年郡内で 7 万疋 22 万円の生産高となり、その後県下に普及し 16 万反以上の商品が福島市に集積された。羽二重の生産と共に節絹織は、福島の絹織物の主力製品となり、以後昭和 20 年代においても近郊の農家の女性によって織り続けられた。

### 2、福島県立蚕業学校初代校長 外山亀太郎

明治 29 年（1896）福島県立蚕業学校が設立されると、その初代校長に就いたのが蚕を材料として「メンデルの法則」を証明した外山亀太郎である。一代雑種の優勢に着目し優良な繭の改良に成功した。それまで国内種での品種改良を、外国種を導入して強健性・多産性・優れた繭質の蚕の改良に成功し、大正 4 年（1918）野口英世博士と同時に学士院賞を授与された。

外山亀太郎は慶応 3 年（1867）神奈川県に生まれ、明治 24 年（1891）東京帝国大学農科大学を卒業し直ちに同大学の助手になり、同 29 年 4 月 10 日弱冠 29 歳で福島県技師、福島県立蚕業学校の初代校長兼教諭に赴任し、校舎建設や教員の採用など創立に尽力し学校発展の基礎を築いた。また高度な授業内容を掲げ県内外の生徒にすぐれた養蚕技術を教え、当時珍しい最新の顕微鏡を導入した。明治 32 年（1899）蚕業学校を辞し、東京帝国大学大学院で蚕による遺伝研究に励

み、「昆虫の雑種学的研究」を著し農学博士となった。カイコを材料としての「メンデルの法則」の立証に取り組み、一代雑種の優性の発見から、蚕の新しい品種改良が進み、養蚕の安定と優良繭生産の基礎となった。この研究は蚕糸界に大きな影響を与えたのみでなく、それまで植物による研究を動物によるメンデルの法則の確認は遺伝学者として画期的な業績であった。

外山亀太郎は大正7年（1918）3月51歳で亡くなった。蚕業学校は農蚕高等学校の名を経て現在福島県立明成高等学校となり、同窓会館に彼の業績を表す資料室があり、貴重な資料が展示收藏されている。（『福島県農業史』『福島県立明成高等学校同窓会館外山亀太郎資料室』）



外山亀太郎像

福島県立明成高校



外山亀太郎資料室（顕微鏡）

福島県立明成高校同窓会館



## 国登録有形文化財「旧農林省蚕糸試験場日野桑園第一蚕室」について

大日向 均（東京都日野市生涯学習課文化財係）

日野市は、東京都のほぼ真ん中（通称「東京のへそ」）に位置し、多摩川と浅川という2つの大きな河川によって発達した沖積低地、丘陵地、台地の3つの特徴ある地形によって形成されています。面積は、かつては、農業中心の宿場町で「多摩の米蔵」と呼ばれていました。「新選組のふるさと」としてご存じの方も多いかと思います。

明治10年頃より養蚕が盛んで、明治20年には蚕業伝習所も設立され、最盛期の昭和初期には、台地上や河川沿岸に桑園が広がっていました。

「旧農林省蚕糸試験場日野桑園」は、杉並を本部として、昭和3年に設置されました。生糸の品質向上のため、桑や蚕の品種改良や優良品種の育成など養蚕関連の様々な研究が行われ、庁舎、蚕室6棟のほか、職員宿舎や寮もあり、最盛期には100名近い方々が働いていたといえます。昭和55年、つくば市への移転に伴い、多くの建物が解体され、ひっそりと時を重ねてきました。現在唯一残っている建物が、平成7年に建設された、第一蚕室です。1階は、鉄筋コンクリート造で、洋風の窓や漆喰装飾等が施され、2階に木造のトラス構造が乗るといって和洋混淆した蚕室です。（建築時の設計図書も残っています。）

平成26年3月に市が所有権を取得し、平成28年度に市・市民・市民団体が第一蚕室の「保存活用計画」等を検討、策定、平成29年6月28日、「国登録有形文化財」に登録されました。現在、第一蚕室のまわりは、「仲田の森蚕糸公園」として整備され、様々に利用されています。また、隣接の小学校では、地域郷土学習で第一蚕室の見学、蚕の飼育や観察、桑見本園の整備（剪定、害虫駆除、草取り）、桑の実からのジャムづくり（食育）等を市民団体・地域等の協力により学習しています。

老朽化のため、普段、内部の公開はしていません。これから保存・修復を進めていくところです。蚕糸関連の観光資源、地域活動の拠点として積極的に活用していくための第1歩として、5月に市商工会と「保存・修復に関する協定」の締結を行いました。

市建築事業者の技術力を終結し、質の高い修復を実現し、歴史、建築的価値を保存しながら、諸力融合で活用を図っていきたいと考えています。また、絹（蚕糸）産業遺産の一つとして他地域との連携も模索しています。かつての甲州道中の宿場町があり、幕末に建てられた本陣建築や新選組に関連した資料館などもあります。これらとも連携しながら地域の魅力を高めることも期待されます。



写真1 旧農林省蚕糸試験場日野桑園第一蚕室外観



写真2 第一蚕室内の蚕室（加温方法の変遷がわかる）



写真3 第一蚕室2階 木造トラス構造



千曲市は、長野県北部を流れる千曲川沿いに位置し、善光寺のある長野市と上田城のある上田市の間にあり、古代から交通の要衝の地として文化や物資が行き交っていたところである。現在、市内にはかつての養蚕業や製糸業が盛んであったころを偲ばせる歴史遺産が点在している。

そうした歴史的遺産を保存・活用し街づくりに活かすために、市では平成28年5月に、「千曲市歴史的風致維持向上計画」の認定を受けた。市内に9つの歴史的風致を設け、千曲川左岸地区（稲荷山・八幡・姨捨・更級・戸倉上山田温泉地区）を重点地区として歴史的風致形成建造物の修理事業をはじめ、稲荷山伝建地区や温泉街の街なみ整備を行っている。

## 1 千曲市の養蚕業

千曲市域で養蚕業が導入されたのは、江戸時代18世紀前半ごろ、19世紀初めには広く養蚕業が行われるようになった。『善光寺道名所図会』（1849）に、千曲市屋代あたりのことが「此辺養蚕の家多し」と紹介されている。19世紀になると蚕種作りを行うようになり、群馬県・埼玉県・山梨県まで販売するまでに発展した。特に、幕末から明治期には市内力石で蚕種が盛んになり、屋根に気抜きを設けた養蚕民家が現在20棟ほど残っており、養蚕が盛んであったことを物語っている。

市内で製糸業が興るのも19世紀になってからである。群馬県前橋から糸指南役を頼み、女子供に習わせたと記録が残る。明治20年代になると市内にも機械製糸工場が設けられ、横浜港から主にアメリカ合衆国に生糸を輸出していた。なお、平成7年（1995）ごろには、養蚕は行われなくなった。

## 2 稲荷山重要伝統的建造物群保存地区に残る絹遺産

平成26年12月10日に選定された稲荷山の重伝建は、弘化4年（1847）の善光寺地震後、幕末から明治・大正・昭和初期の商家町である。江戸時代から続く太物（綿花や綿織物）の集散地から、蚕糸業を中心とした商業地として発展した。

明治14年（1881）には、地元の和田郡平や小出八郎右衛門が中心となり「稲荷山銀行」が開業した。明治26年（1893）には、他銀行と合併し「株式会社第六十三国立銀行」となり、大正11年（1922）まで稲荷山に本店を置いた（現八十二銀行、県下一の地方銀行）。

当時の建物は、大正14年に売却され、隣接地に移設され現存している。なお、明治14年に開業した「稲荷山銀行」の看板は、千曲市教育委員会が所蔵している。

明治20年代はじめの長野県町村課税格付けによると、稲荷山町は一等の長野町（現長野市）、二等の上田町（現上田市）に次ぐ、三等の松本町（現松本市）・飯田町（現飯田市）と同格であった。



稲荷山銀行表札



力石の養蚕民家



元 六十三銀行本店

### 3 絹に関わる歴史的人物

千曲市域の蚕糸業に関わりの深い歴史的人物を通して、蚕糸業がどう発展してきたのか当時の様子について紹介する。

#### (1) おおたにこうぞう 大谷幸蔵 サムライ商人

豪農の長男に生まれた幸蔵は、文久3年(1863)に松代藩羽尾村の産物会所の取締役となり苗字帯刀を許され、慶応元年(1865)には藩士となり、明治2年(1869)には松代商法社頭取になったサムライ商人である。

明治2年に蚕種をイタリアに輸出し、自らもイタリアに商談に訪れている。写真は、明治4年3月1日にミラノで撮影されたものである。前列左に座る幸蔵・イタリア人実業家ブランビーラ氏・ファルファラ氏ら。

この渡航中の明治3年11月25日に、幸蔵ら商法社が蚕種を買い集めに使った商法社手形(藩札、うまのさつ「午札」と呼ばれた)の価値が大幅に下落し、「松代騒動」(「午札騒動」とも呼ばれる)が起り、幸蔵の自宅が焼かれた。

#### (2) こいではちろうえもん 小出八郎右衛門 稲荷山銀行創立者

明治13年(1880)、紡績機械を購入のために横浜視察に出かけ、「横浜正金銀行」の看板を見て「金銀が行ってしまうばかりで、入ってこない・・・」と、銀行に興味を持ったという。横浜の有力者<sup>おのみつけ</sup>小野光景氏(長野県出身)を紹介され、銀行について知識を得て稲荷山に帰り、地元有力者の<sup>わだぐん</sup>和田郡平に報告し、早速二人で「稲荷山銀行」設立を計画した。明治14年に和田が頭取、小出は専務取締役となり、「稲荷山銀行」は小出の家に設立された。なお、創業時の建物は今はない。

和田郡平は、代々造り酒屋(現長野銘醸株)を営む有力者で、アメリカから輸入されたリンゴの苗木をいち早く仕入れ、リンゴ栽培の礎を築いた人でもある。当時のリンゴの木が、今も1本現存し秋には実を付けている(千曲市指定天然記念物)。

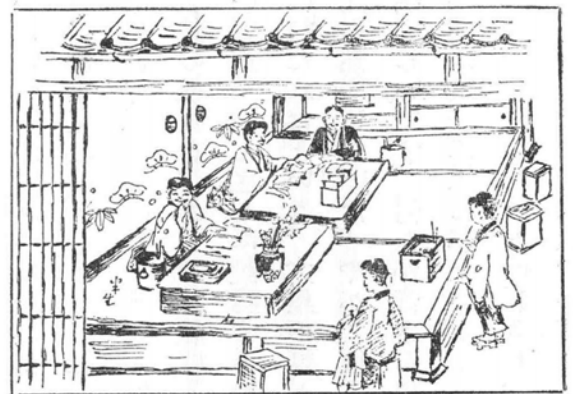
#### (3) やまざきとらはち 山崎虎八 種屋

現在、養蚕をしていた当時の面影を残す民家が多数残されている市内力石では、主に蚕種を製造し販売していた。そうした一人、山崎虎八は、<sup>きんけんどう</sup>「僅儉堂」という屋号で二代続けて種屋を営み、行商に出かけていたという。この写真は、ご子孫の山崎誠一さんより提供された写真で、虎八おじいさんが大正中ごろ(1920年頃)、飛騨高山へ蚕種の行商に行く旅姿だという。着物に、カンカン帽子・地下足袋、こうもり傘を持ち、ハイカラな出で立ちである。

山崎家には、冷蔵庫のない当時、半地下式の土蔵で蚕種を保存していたという。土蔵は、今では野菜の保存に使っている。当時は、蚕種保存に風穴が利用されていた。現在市内には、蚕種を保存した風穴が3か所(森・倉科・芝原)、蚕糸業関連歴史遺産の悉皆調査で確認されている。



ミラノで (千曲市教育委員会所蔵)



当時の稲荷山銀行『稲荷山四百年の歩み』より



種屋“虎八”行商旅姿



## 世界遺産候補地・外海と養蚕の記憶について

日宇スギノ（フェルム・ド・外海（長崎市）代表）

私の住む長崎市外海（そとめ）地区は、長崎駅から西北へ車で4、50分ほどの所に位置しています。先般、ユネスコの諮問機関である国際記念物遺跡会議（イコモス）が、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」を世界文化遺産に登録するよう勧告がありましたが、12の構成資産中、「外海の出津（しつ）集落」と「外海の大野集落」の2件がこの地域にあります。キリシタンの母郷と呼ぶ人もいます。かつて禁教期に外海から3,000人もの人が移住したといわれる五島列島をはるかに望む海岸線と夕陽の美しさには定評があり、海沿いの国道は「サンセット・ロード202」と名付けられています。

遠藤周作氏の小説『沈黙』の舞台となった地で、氏は、何度も訪れたこの外海を「神様がぼくのためにとっておいてくださった町だ」と言っておられたそうです。生前、「出津文化村」の一角に建てられた「沈黙の碑」には“人間がこんなに哀しいのに 主よ、海があまりに碧いのです”と、氏の直筆の文字が刻まれています。2000年のミレニアムの年には、海を見下ろす丘の上に遠藤周作文学館も開館しました。

潜伏キリシタンの歴史はもとより、明治12年、外海地区に赴任したフランス人宣教師ド・ロ神父（1840～1915 / 1871から2年間、横浜で司牧活動）の業績も特筆されます。神父は、布教のかたわら亡くなるまでの33年間、貧しかった村人の暮らしの救済のために私財を投げうって多大な貢献をしました。出津教会、大野教会の建設ばかりではなく、出津救助院（現在、いずれも国指定重要文化財）を創設、パン、マカロニ、そうめん、織物、イワシ網工場（後に保育所に）など、女性の自立を主眼とした授産事業を起こしました。また、原野を開墾し、防波堤、製粉工場などもつくり、移住開拓も推進しました。先進的な医療活動にも取り組み、さらには、ヨーロッパの新しい建築、土木技術も伝えました。とにかくオールマイティーな愛の人であり、来日してから一度も故国に帰ることはありませんでした。1978年には、旧外海町が神父の故郷・ノルマンディー地方のヴォスロール村と姉妹都市提携をしており、現在も市が引き継ぎ「心の国際交流」を続けているところです。

一方、外海でも旧大村領であった神浦（こうのうら）地域には3カ寺が並ぶなど、仏教徒も多く、旧佐賀領地域に多いカトリック、かくれキリシタンなどが共存するという特異な宗教文化が形成されており、研究者にとっては、非常に興味深い場所と言えると思います。

養蚕については、ド・ロ神父の記録簿（「日目の帳」）にもカイコとクワのことがローマ字で記されており、この地域でも古くから飼育されていたことがうかがわれます。旧出津救助院は、のちにカトリックの修道院として使われました（30年ほど前まで）が、シスターたちがカイコを飼っていたことを私も記憶しています。昔、救助院で働いていた人たちの制服は残っており、ド・ロ神父記念館に展示していますが、この制服の生地はシルクではありません。多分、生糸は長崎市内の外国人居留地に販売されていたのではないのでしょうか、私の家の近くでも20年ほど前まで、この地域独特の結晶片岩の石積み住宅で養蚕をやっていました。この住宅を含め、一帯は平成24年に「長崎市外海の石積集落景観」として文化財保護法に規定する重要文化的景観に選定されました。往時には5,6件の家庭で養蚕をやっていましたが、現在、飼育農家はなく、当時の関係者の子供でさえ高齢となり、養蚕に関する人々の記憶も薄らいできています。

これを機に、外海における養蚕について調査をしていきたいと考えております。

※「フェルム・ド・外海 (Ferme de SOTOME)」は、フランス語で外海の農家、農園という意で、30年前から地域づくり活動に取り組んでいるボランティアグループです。



国指定重要文化財出津教会



養蚕が行われていた石積み住宅

(重要文化的景観) 3

## 白川郷田島家養蚕展示館

三島 敏樹（白川郷田島家養蚕展示館々長）

### 白川郷田島家養蚕展示館

白川郷の合掌造り民家は、世界文化遺産（1995年登録）の構成要素でもあり、伝統的な集落景観の象徴的な存在として、この地域を訪れる人々のなまなざしを集めている。

昭和30年代、日本は高度経済成長の機運が高まる中で、白川郷の住民の多くは、生活の利便性や向上を求める声も大きく、ダムの建設などによる集団離村など、様々な要因が重なり徐々に合掌造りが集落から失われつつあった。

昭和40年代に入り、一部の住民の間から、失われていく合掌造りとその景観を残して行こうという運動が起こり、文化財の保存、継承と地域振興をつなげる上で、民宿や土産店など、観光産業への活用を図っていったのである。しかし、合掌造りは従来、地域の自然環境を背景とし、生業であった養蚕を営む大空間として、独特な大屋根が形成されたのものであるが、まだ養蚕およびそれに関連する文化についても、一部を除いてほとんど継承する仕組みもないのが現状である。

そこで本館では、空き家となっている旧田島家（白川村教育委員会管理）において、養蚕を持続的に実施し、養蚕文化の普及を通し、国内外の来訪者に合掌造りの本質や白川郷独特の養蚕の歴史をお伝えする施設としてご利用頂きたいと考えている。



写真1 田島家養蚕展示館



写真2 田島家養蚕展示館内部



写真3 田島家養蚕展示館小屋裏養蚕展示



写真5,6 かつての田島家小屋裏養蚕の様子



写真4 同上



## 埼玉の絹文化をめぐる市民活動レポート

藤井 美登利（さいたま絹文化研究会事務局・NPO 川越きもの散歩代表）

### ◆高麗神社（埼玉県日高市）に天皇皇后両陛下がご訪問

2017年9月、私的旅行のため天皇皇后利用陛下が飯能・日高を訪問され、高麗神社を参拝されました。「高麗」とは朝鮮半島にあった高句麗のことで、同神社には7世紀に日本に渡ってきた高句麗の王族・高麗王若光が祀られています。騎馬、和紙、機織りなどの最新技術がこの地から八王子、秩父、小川町などに伝播したといわれています。境内には代々宮司家族が住んできた17世紀に建てられた国指定重要文化財の高麗家住宅があり、皇后陛下は住居の中の養蚕棚を興味深くご覧になられていました。翌日は深谷の渋沢栄一誕生の地を訪問されました。渋沢邸は高窓のある典型的な養蚕農家の建物で、明治時代に宮中ご養蚕を復活させたのは渋沢栄一です。皇居紅葉山での皇后のご養蚕は先日、雅子妃に引き継がれたと報道されました。今回の私的旅行は、両陛下の養蚕・絹文化への関心の高さ、寄り添うお気持ちを感じられました。（高麗神社の高麗文康宮司は、さいたま絹文化研究会の会長を務めています）



両陛下をご案内する高麗神社高麗宮司

提供：埼玉県

### ◆鶴岡・庄内藩士ゆかりの製糸工場（株）松岡と埼玉のきもの作り

日本にはもう、器械製糸工場は2つしか稼働していないことをご存知でしょうか。群馬県の碓氷製糸と今回の鶴岡フォーラムで見学する松ヶ岡開墾場にルーツをもつ酒田市の松岡（株）です。養蚕農家も激減しており、平成18年に全国に1345戸あった養蚕農家は、平成28年には349戸になってしまいました。群馬（122戸）、福島（41戸）について埼玉県は全国3位（29戸）の養蚕県です。ちなみに山形県は8戸。NPO川越きもの散歩では、埼玉県秩父地域の養蚕農家見学会をきっかけに、秩父地域で飼育されているブランド繭「いろどり」を年間100キロ購入し、オリジナルのきもの作りを行いました。当会が購入した繭は、松岡（株）に運ばれ、生糸に加工されて、本庄市の黒沢織物の伝統工芸士、黒沢かつ代さんが草木で染め、手織りのきものとなりました。受注生産の作り手とつながる顔の見えるきものとして会員限定で販売しました。松岡（株）は明治5年に庄内藩士が開墾し養蚕を始めた松ヶ岡開墾場に、明治20年（1887）大蚕室と一体となった製糸工場として建設、創業された由緒ある企業です。大正2年に松嶺分工場が設置され、昭和12年にはそちらが本工場となりました。昭和40年以降、製糸の斜陽化で婦人服部門や電子部門も新設し、最新鋭の航空機部品も製造しています。製糸部門は採算性の悪い事業となっていますが、会社のルーツとして継続していく使命感があるとのこと。松岡（株）に依頼した生糸で製作したきものやストールは、購入者にとって特別な一枚となっています。



松岡(株)で作った生糸

（埼玉県ブランド繭いろどり）

### ◆第3回さいたま絹文化フォーラム「秩父絹発祥の地 横瀬」 ご報告

2018年3月18日（日）横瀬町町民会館大会議室にて開催。

横瀬町は秩父盆地の南東部に位置し、都心から70km圏、名峰武甲山を背景に、棚田や果樹園など里山の風景が広がる人口約8400人の小さな町です。

織物産地としての歴史は古く、戦国時代北条氏邦の家臣の根古屋城主、朝見伊賀守が織物を奨励し、広く生産されるようになったといわれ、明治以降は秩父銘仙の産地として発展しました。武甲山御嶽神社里宮には、埼玉県指定旧跡「秩父絹発祥の地・城谷沢の井」が伝えられています。秩父銘仙の大きな織元が点在しており、学習院女子、お茶の水女子など女学生向け銘仙の生産も担っていました。坂善織物工場には戦前、学習院女子校が見学旅行に来ています。フォーラム会場に隣接する横瀬町民俗資料館では、

銘仙を1500枚収集している木村和恵さんによる銘仙鑑定会も開催。秩父銘仙の国の伝統工芸品指定に関わった、埼玉県産業技術総合センターの影山和則氏が後継者育成、および印刷会社と連携したプリンターでの銘仙柄布地製作の話などをされました。埼玉大学の田村均教授は、戦前の染色、製織技術の革新に挑んだ織物組合幹部たちの話を紹介。交流会では昭和初期に織物組合が当時の同盟国ドイツのヒットラーに着物を贈呈したことなども紹介されました。参加者には秩父神社より繭守りが頒布されました。



第3回さいたま絹文化フォーラム

秩父の養蚕農家見学から始まった着物作り

◆第4回さいたま絹文化フォーラム開催のお知らせ「川越・横浜シルクものがたり」(仮) 2019年3月9日(土) 午後1時より 川越氷川会館にて

川越のシンボル・時の鐘は明治26年(1893)の川越大火で焼失しました。町の3分の1を焼失する大惨事で、現在観光客でにぎわう一番街の蔵造りの建物は、この大火の教訓で建てられた防火建築でもあります。この時の鐘の再建費用に横浜の生糸商人たち(原善三郎、茂木惣兵衛、平沼専蔵ら)が多額の寄付を寄せていることは、殆ど知られていません。120年前の人たちは知っていた横浜と川越のつながり。シルクがそのヒントになるのでしょうか。今も一日4回、鐘の音がゆったりと響く川越で一緒に考えてみませんか。



伊沢栄一生誕の地、大規模養蚕農家の建物



横浜の生糸商人が再建費用を寄付した川越のシンボル時の鐘



## 裏絹で栄えた小川町 その歴史的遺産の活用に向けて

平山友子（NPO 法人小川町創り文化プロジェクト理事）

埼玉県のはぼ中央に位置する小川町は、ユネスコの世界無形文化遺産に登録された細川紙の産地として広く知られている。しかし、この町が裏絹の一大産地として隆盛を誇ったことは、和紙ほどには認知されていない。小川町は、古くから八王子と上州を結ぶ八王子道と、江戸から秩父への最短距離である川越秩父道が交わり、人や物資が集散した交通の要衝であった。近郷で農間稼ぎとして行われていた和紙や生糸、秩父で産出される煙草、江戸から運ばれる米などが町場に集まり、江戸時代には毎月一日と六日に「六齋市」という市でにぎわった。小川町が最盛期を迎えるのは明治以降である。和紙や酒に加え、裏絹も町に富をもたらした。現在、町内にはかつての栄華を偲ばせる歴史遺産が数多く所在している（写真1～4）。

その中でも、一刻も早い保存・再生が望まれる旧萬屋旅館と、レストランとして再生・活用が決定した玉成舎（旧養蚕伝習所）について報告する。



写真1 和紙体験学習センター

埼玉県立小川製紙研究所として昭和11年に竣工。外壁のドイツ下見板、スクラッチタイルの使用、半円形の窓など、昭和初期のデザイン感覚が残る。戦前の官民一体となった産業育成のための貴重な施設である。



写真2 割烹旅館二葉本館

寛延元年（1748年）創業。小川町の老舗であり、花柳文化発展の一翼を担った。昭和8年築の本館と、回遊式庭園内にある離れ「六六亭」が登録有形文化財に



写真3 割烹福助

二葉と並んで料亭文化を担った老舗。田山花袋の随筆にも登場する。明治期に竣工した建物を昭和6年に大改装している。遊び心のある意匠が特徴。



写真4 三協織物石蔵

12間×4間の大規模な大谷石造の蔵である。大正14年の築。元は煙草蔵だったものを、昭和40年代に裏絹の産地問屋が購入し、商品を収めていた。現在はほぼ空の状態。時折、コンサートなどが開催されている。

（写真：植久哲男）



写真5 田中家長屋

建築年は不明であるが、実測調査によって明治30年代以前の築と想定される。道路のカーブに合わせて建てられているため、台形の平面である。昭和中頃までは、大工や畳職人、裏絹の町工場兼住まいがあった。現在も店舗や住宅として使用されている。登録有形文化財申請中。



## ・旧萬屋旅館

小川町の中心部、川越秩父道に面して建つ旧旅館である。20年程前まで客室数14で営業していた。表通りから裏通りまで続くおよそ180坪の敷地に主屋2棟と離れ、土蔵が配置されている。街道に面した棟は商人宿、遊廓街に面した離れは洒脱な意匠と、異なる趣を見せる。建設年は、中央の主屋が大正15年（1926）であること以外定かではない。実測調査や古写真によって、大正末から昭和初期にかけて大改修が行われたものの、街道に面した主屋はそれより古いものであると推測される。近年は老朽化が進み、雨漏りがひどい状態であった。離れは高床式の独特の構造のため、建物全体が歪み、立ち入りが危険な状態になっている。2017年に当NPOの会員有志が主屋の雨漏りの応急処置を施したが、全体に一刻も早い修復が望まれる。



写真6 街道に面した外観  
(写真：太田まさお)



写真7 手の込んだ人造石研ぎ出しの洗面化粧台と本業タイル



写真8 離れに向かう渡り廊下  
(写真：太田まさお)

## ・玉成舎

養蚕技術の向上を目的として、明治21年に現在地から500メートルほど離れた場所に建設された。竣工間もないころから集会場としても使用されており、明治24年には板垣退助が訪れた記録が残る。しかし、明治26年に玉成舎は廃止。その後、医院、登記所に賃貸されたほか、芝居小屋としても使われていた可能性がある。玉成舎が次の盛時を迎えたのは大正時代以降である。創設者の息子が当時着物の裏地に使われていた紅絹染色を試み成功。昭和の初めごろには小川町に富を蓄積させた。昭和6年に現在地に移築され、事務所兼住まいとなった。昭和55年ごろ廃業。

主屋は、古写真等によると当初は5間四方の2階建てで、屋根は方形であった。東側に間口7間奥行5間の平屋が接続していた。移築にあたって間口を半間延ばしたため、現在の入母屋屋根になったとみられる。現在の建物は、四方せがい造り、明治期の建物としては2階階高の高い、一般町家には見られない特徴的な外観を呈している。他に、昭和35年築、間口3間奥行4.5間で、瓦葺きトラス小屋組の大谷石蔵と、同時期の増築と推測される仏間などがある。

玉成舎は2016年まで住宅として使用されてきた。同年12月、最後の居住者が高齢のため転居。土地家屋の管理を任された親族が一旦は解体を決定した。しかし、小川町都市政策課と当NPO法人、相子環境計画、小川町商工会といった公・民の連携によって解体を免れ、町内のレストランが購入した。現在、玉成舎の名を冠した店を夏までにオープンさせるべく、再生工事中である。



写真9 西側から見た外観。震災と雪害により、熨斗瓦が崩れていた



写真10 片付けが始まった頃の東側外観



写真11 再生に向けたそうじ会の様子

## 野島公園旧伊藤博文金沢別邸の保存・活用に係る取り組みについて

寺岡 真理子（公益財団法人横浜市緑の協会）

かつて絹を海外に輸出するための一大集積地だった横浜には、今も市内に絹とゆかりのある施設や遺構が数多く残されています。私たち（公財）横浜市緑の協会は、「横浜山手西洋館」をはじめとして、こうした施設のいくつかを管理運営しています。今フォーラムでは、今年が明治 150 周年ということもあり、「富岡製糸場」ともゆかりの深い明治の元勲伊藤博文が建てた、「旧伊藤博文金沢別邸」の保存と活用について、紹介していきます。



### ■旧伊藤博文金沢別邸の沿革

旧伊藤博文金沢別邸は、茅葺寄棟屋根の田舎風海浜別荘建築で、明治 31（1898）年、横浜市と横須賀市の市境にある金沢区野島町に建てられました。伊藤博文が明治 4（1871）年に「富岡製糸場」設立に関わってから 27 年後のことです。

野島町の周辺地域は、江戸時代にはすでに景勝地として名が知られており、町内にある野島山は、浮世絵画家歌川広重に「野島の夕照」として描かれるなどしました。明治時代に入ると、東京近郊の海浜別荘地として注目され、第 4・6 代内閣総理大臣の松方正義や大蔵大臣・外務大臣等を務めた井上馨、日本画の大家の川合玉堂なども別荘を設けています。

伊藤博文没後は伊藤家の別荘として使用されたのち、伊藤家と所縁のある民間企業の保養所として使用され、昭和 34（1959）年に横浜市所有となりました。平成 19（2007）年には市によって解体工事・調査が行われ、平成 21（2009）年に残存部材を活用し創建当時の建物に近い形で復元されました。そして同年 10 月に、庭園と併せて野島公園の公園施設として一般公開され、現在に至っています。

博文邸は、明治時代の海浜別荘建築の様相を現在に伝える建築物として大変貴重であり、平成 18（2006）年 11 月には横浜市の指定有形文化財に指定されました。

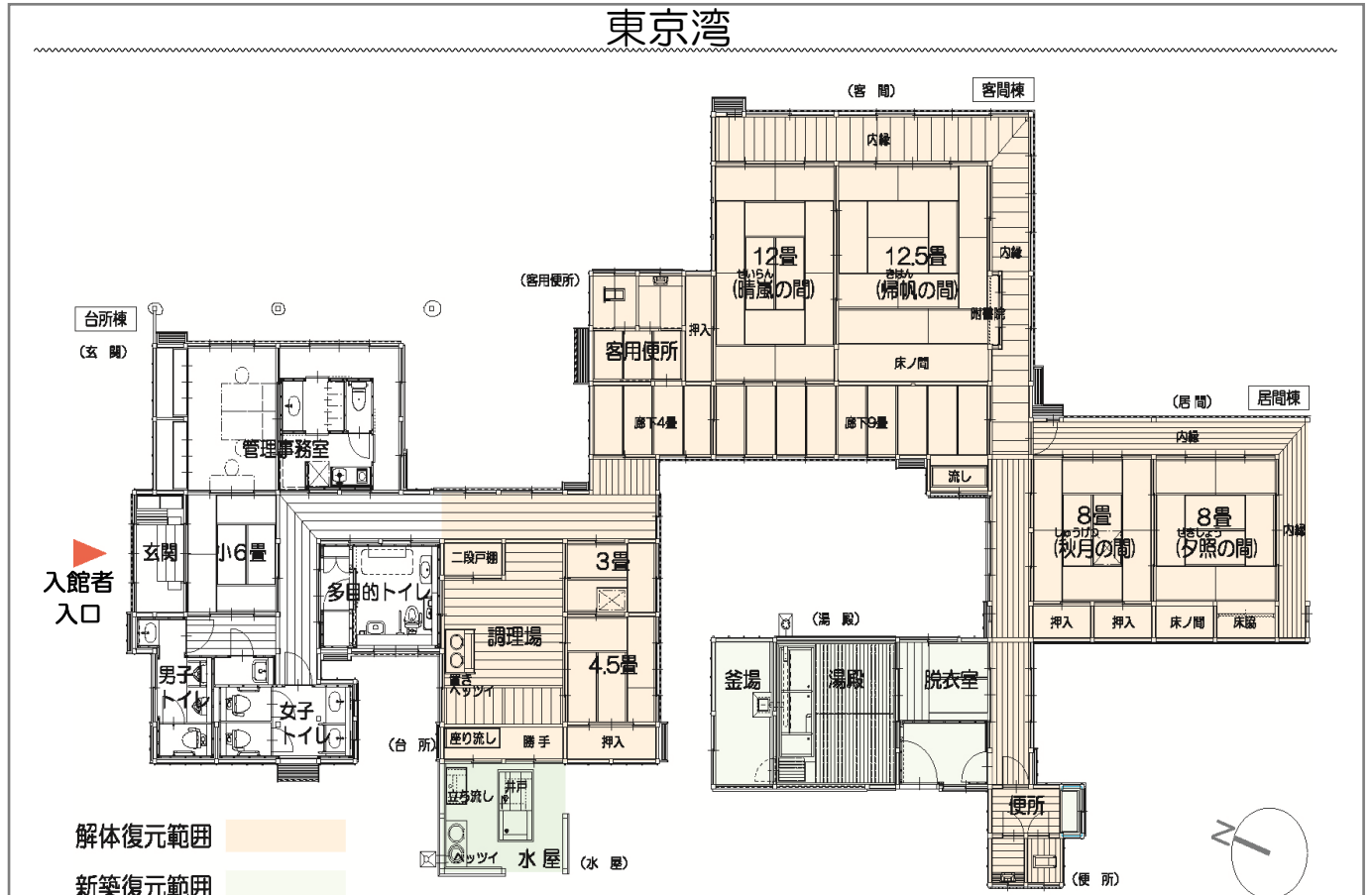


### ■公園施設としての旧伊藤博文金沢別邸の位置付け

博文邸は現在、野島公園の公園施設として、近代日本の基礎を築いた伊藤博文の紹介はもちろん、明治期の建築物、明治期の暮らしなどを現代の皆様にご覧いただき、感じていただく場として機能しています。気軽にお立ち寄りいただけるよう、月 2 回の休館日と年末年始を除いては年中開館、入館は無料です。



## ■旧伊藤博文金沢別邸の見どころ



旧伊藤博文金沢別邸は、客間二部屋（晴嵐の間・掃帆の間）、居間二部屋（秋月の間・夕照の間）、客間用手洗、居間用手洗、湯殿、調理場、女中部屋（調理場横の3畳間と4.5畳間）、を備えた寄棟造茅葺屋根の田舎風海浜別邸建築です。目の前は東京湾です。一見、質素に見える建物ですが、随所にこだわりが見られます。

例えば、客間と、客間手前の調理場と女中部屋、客間先の居間とのしきりの引戸は漆塗りで、客間の欄間には鳳凰が施されています。そして客間縁側にはガラス戸が入れられており、当時はベルギーの最新技術で作られ輸入されたガラスが入っていたそうです。障子はすべて職人の高い技術力が要求される「千鳥張り」で張られています。

## ■旧伊藤博文金沢別邸の保存・活用に向けた取り組み

横浜市から建物の維持管理を委託された当協会にとっては、保存は最重要の責務です。

海が眼前に広がり、かつ大変風通しの良い設計の建物のため、潮（塩分）・土による建物内部の傷みは避けられません。日々の清掃は、傷み防止以外に、補修が必要な箇所を早期に発見する上で重要な作業です。建具・床・壁に、より視線を向けられるよう清掃は掃除機を使用せず、ほうき、モップ、雑巾などの手動の道具を使用しています。

昨年11月には、別邸の復元工事施工業者による補修工事を行い、建具の調整を行った他、火災等の事故防止のため電源周りの補修を行いました。

活用に向けた取り組みとしては、より多くの皆様へ足をお運びいただき、伊藤博文・建物・明治文化を知っていただくため、地域の様々な団体と協働しながら、次のような取り組みを行っています。



① 旧伊藤博文金沢別邸に興味をお持ちの方を対象にした取り組み

地元ガイド協会との協働による、伊藤博文をはじめとした明治期を捉えた歴史講座を開催しているほか、茅葺屋根の燻蒸見学会などを定期的に行っています。

② 「まず」足を運んでいただき、興味をお持ちいただくための取り組み

・「いつでも喫茶」の実施（抹茶と菓子の提供）

海を眺める客間では、抹茶と菓子の提供を有料で行っています。くつろいでいただく時間を楽しんでいただくことで、別邸で伊藤博文が感じていたであろう魅力に共感していただくきっかけづくりに努めています。

・イベントの実施

「伊藤博文」や「建物」とは視点が異なるイベントも積極的に実施しています。

源氏物語朗読会、薬膳講座、庭園ヨガなど講師の方を招いて実施するイベントの他、地元の皆様にご協力をいただくイベントも実施しています。



関東学院大学人間共生学部共生デザイン学科水沼研究室の学生さんには年 2 回イベントを企画運営していただいています。昨年度は学生向けの工作教室やライトアップコンサートを開催していただきました。和菓子講座は地元和菓子店さんに、茶道体験は地元茶道会の皆様にご協力いただき、開催しています。

関東学院の学生さんもイベント運営をきっかけに博文邸を知っていただいた方も多くいらっしゃいます。今年 5 月に実施しました庭園ヨガでは、これまで別邸を訪れたことがない、知らなかったというお客様にも多数お越しいただき、邸内をご覧いただいています。

旧伊藤博文金沢別邸は 2014 年から 3 年ほどは年 5%程度ずつ来館者が減る傾向にありましたが、これらの取り組みにより、2017 年度は回復傾向となりました。2018 年度は、明治 150 年を記念したイベントとして、秋ごろに伊藤博文の故郷である萩市と協力し、伊藤博文ゆかりの品を展示する特別展示会の実施を計画しており、さらなる来館者の増に向けて取り組んでいます。

### ■むすび（今後の展望）

横浜や伊藤博文が日本のシルクが発展する基礎を作り、日本シルクの質の高さや美しさを広く発信していったように、こういった活動を通して伊藤博文、明治を広く知っていただき、感じていただけるよう、これからも試行錯誤を続けていきたいと考えています。



## 近代蚕糸業の革命児・速水堅曹

手島 仁（前橋学センター長）

### 日本で最初の前橋

群馬県では、昭和22年（1947）に制定された『上毛かるた』が、県民誰もがそらんじていえる日本を代表する「郷土かるた」となっている。その札に「日本で最初の富岡製糸」がある。これは明治5年に創業し世界遺産に登録された官営富岡製糸場のことである。

しかし、日本で最初に洋式機械製糸が始まったのは明治3年（1870）に創業した「藩営前橋製糸所」である。ではどうしてこのような間違いが通説となってしまったのか。それは、官営富岡製糸場は政府が巨用を投じ大規模な模範工場をつくり、民間に払い下げられても、三井、原合名、片倉と大資本が経営し、建物群が現在まで残ったからである。

これに対して、財政も厳しく藩内に反対勢力を抱えていた前橋藩のものは小規模で、廃藩置県後、群馬県、政商の小野組、内務省勸業寮の管轄を経て、勝山製糸、温井製糸となったが、いまではその形跡さえなく、小さな石碑が建っているだけである。両者のこの違いが大きく影響している。

### 『富岡日記』に劣らない『関根夜話』

藩営前橋製糸所は小参事・深沢雄象のもと生糸取締役の速水堅曹が責任者であった。雄象の娘・孝は万延元年（1860）生まれで、藩営前橋製糸所創業のころは10歳であるが、昭和9年（1934）頃に回顧録『上州蚕業史・関根夜話』を残した。74歳の孝が10歳から20歳くらいまでのことを抜群の記憶力で語っている。

まさに、日本の近代蚕糸業草創期の有様を、女性の立場から生き生きと描き、その価値は官営富岡製糸場の伝習工女であった横田（和田）英の『富岡日記』に劣らない。横田英も深沢孝も日本の近代蚕糸業草創期を担った代表的な女性である。

横田英は安政4年（1857）生まれで、官営富岡製糸場の伝習工女になったのが16歳。『富岡日記』はその名称とは違って回顧録で、明治40年（1907）～大正2年（1913）の間に当時を振り返って書かれた。英は50歳から56歳であった。英は昭和4年（1929）に74歳で、深沢孝は昭和29年（1954）に94歳で亡くなった。

深沢孝の回顧録は甥の深沢信三が口述筆記したもので、深沢家が群馬県勢多郡南橋村大字関根（前橋市関根町）にあったので『関根夜話』となった。和田英の手記は昭和6年（1931）年『信濃教育』2月号で「和田英子女史の手記」として発表され、同年9月『富岡日記』という題で古今書院から出版。全国的に知られるようになったのは戦後であるが、深沢孝が『富岡日記』を読んだ可能性も否定できない。

### 深沢孝がみた富岡製糸と前橋製糸

深沢孝は富岡製糸場と前橋製糸所をどのように見ていたのであろうか。『関根夜話』には次の記述がある。

「生まれ出て、終わるまで不遇に過ぎて、世の中から忘れ去られた大渡製糸（藩営前橋製糸所）に為にも、随分涙ぐましい犠牲が払われたのでした。国立の富岡製糸所は、日本蚕業正史に燦燦とした記録が残されています。それは、国立製糸所として始められ、三井・継ぎ・原商店・受継ぎはしましたものの経済的背景が大きかった為・いろいろ経営者が移り代わっても、今もなお・昔の古い工場の姿が見られるだけ、世間から忘れ去られないいでいるのでしょうか。それに引きかえて大渡製糸所は、富岡の創立に先立つこと二年、明治三年の開業で日本で最古の洋式製糸所でありましたが、不遇に葬られて、今日の若い方など、特に蚕業史でも調べた人でない限り殆ど知らない者が多いことでしょう。「この不運な大渡製糸所が、一粒の麦が地に埋もれて沢山の麦を生やしたように、ここは果敢なく終わりましたが、ここに伝習に来ていた人々は、各地に行って・それぞれ立派な実を結びました。その実の生えた第一は水沼の星野製糸（※群馬県桐生市）、関根の研業社（※同県前橋市）などでしょう。そして此の実から多くの子孫が広まり、各地に大きな業績を残しました。前に申しました熊本製糸（※熊本県、長野藩平）、二本松の佐野製糸（※福島県、佐野理八）、宇都宮の林製糸（※栃木県、大嶋商舎のことか？）など皆・この血を受けた嫡出子」。

深沢孝は日本の近代蚕糸業が官営富岡製糸場を以って語られることに、今から 80 年以上も前に異議を唱えたのである。

### 官営富岡製糸場・『富岡日記』史観

今年は明治維新 150 年の節目。維新 100 年のときと同じように賛否両論あるが、薩長史観を克服する書籍が多く現れたり、各地域に即した歴史を描こうとする動きが現れたりすることは、「地域創生」の観点から大変喜ばしいことである。

明治以来、養蚕・製糸業は全国で行なわれ、わが国の近代化の先兵となり地域づくりを担った。産業構造の変化により養蚕・製糸業の果たした役割は忘れられ、日本三大製糸都市と言われた前橋市にも製糸業の産業遺産はないに等しいが、これは全国的な姿である。しかし、官営富岡製糸場が世界遺産に登録されたことで、各地で近代日本の地域づくりのもとになった絹産業を見直しながら、地域創生を目指す機運が起こったことは喜ばしいことである。

しかし、その視点が官営富岡製糸場・『富岡日記』史観になっているのは残念なことである。筆者のような立場からの発言は学問的な自由の観点から許してもらいたいのであるが、映画『赤い襷』はその典型ではないかと思う。映画作品としてはすばらしいが、その描き方を見ると、製糸場をつくった頭脳集団は渋沢栄一・尾高惇忠ら埼玉県人、伝習工女は横田英ら松代工女の長野県人、ポール・ブリュナの評価が「生糸の神様」として驚くほど高く、肝心の群馬県は、製糸場の建設された富岡がブリュナのフランスの郷里に似ていることが評価されているくらいである。

伝習工女の待遇にも、薩長藩閥の力は影響していて、山口県の工女が優遇されたことが描かれているが、彼女たちが帰郷して、どれほど山口県のあるいは日本の殖産興業に貢献したのか、筆者は知らない。

### 六工社、富岡製糸、藩営前橋製糸の恩人・勝山宗三郎

横田英らは 1 年後に帰郷し、明治 7 年（1874）8 月に長野県埴科郡西條村（長野市松代町）に建設された器械製糸・六工社に参画。同社は日本初の民間器械製糸場と言われている。

けれども、明治 4 年に藩営前橋製糸場を指導したスイス人・ミューラーを招いて小野組が築地製糸場を、同 5 年には藩営前橋製糸場で伝習させ川村迂叟が大嶮商舎（栃木県宇都宮市）を、同 7 年 3 月には藩営前橋製糸場で伝習した星野長太郎が水沼製糸所（桐生市）、藩営前橋製糸場の関係者であった深沢雄象、桑島新平らが研業社（前橋市）を、それぞれ創業している。また、長野県の器械製糸の最初は、藩営前橋製糸所で学んだ宮下利兵衛と細川吉兵衛らがつくった諏訪形製糸場（上田市）である。

深沢孝は水沼製糸所で伝習を受け、研業社で製糸婦として働いた。郡製糸の重役・高倉平兵衛が研業社で製糸技術とキリスト教徒を学んで帰ったように、水沼製糸、研業社、二本松製糸、大嶮商舎も全国から多くの伝習生を受け入れた。

六工社は創業後すぐに経営難に陥り、大里忠一郎ら社員一同お手上げで、前橋の生糸商・勝山宗三郎に再興を依頼した。勝山は 3 年間、六工社の生糸をアメリカ向けに一手に買い取る特約をして再興させ、同社は全国有数の製糸場となったのである。

また勝山宗三郎は、官営富岡製糸場開業以来、繭買い入れを担当。大蔵省に囑託され 4 年間続けたので手を引きたいと申し出たところ、大蔵省はこのまま続けるか、廃藩置県後に小野組に経営が移されたが同組が破産し、内務省勸業寮管轄になっていた旧藩営前橋製糸所を引き受けるか、二者択一の選択を迫った。

そこで、勝山は前橋製糸所を引き受けることにし、釜数を増やし 40 人繰り規模に拡大して「大渡製糸所」（勝山製糸）と改称した。勝山製糸は、二本松製糸（福島県）、伊藤製糸（三重県）、精糸原社（群馬県）と並んで四大製糸と呼ばれた。このうち官営富岡製糸場と直接的な関係があったのは伊藤製糸だけである。

### 佐野瑛著・速水堅曹監修『大日本蚕史』

日本の近代蚕糸業の草創期を語る資料として、佐野瑛の手になる書物がある。佐野は山梨県出身で、病気や借金に苦しみながら、8 年の歳月をかけて資料を集め、『大日本蚕史 正史』『大日本蚕史 現業史』の大作を明治 31 年に出版した。

「一介の書生」に過ぎなかった佐野に暖かい手を差し伸べたのが、蚕糸業界の重鎮であった速水堅曹であった。佐野は「自序に代ふる辞」でそのことを披瀝し速水に謝意を表している。佐野は悲運にも翌年 34 歳の若さで亡くなった。『大日本蚕史』が速水堅曹監修とあるように、速水は資料などを提供し佐野を援助した。その速水の資料は、堅曹の子孫である速水美智子氏が『速水堅曹資料集—富岡製糸所長とその前後記—』として平成 26 年に上梓された。



## 蚕糸業の革命児・速水堅曹

前橋藩はスイス領事シーベルの献策で、スイス人のミューラーを雇い入れた。ミューラーは神戸の居留地にいたが、イタリヤで13年間製糸業に従事し、その技術に精通していた。しかし、藩財政が厳しくミューラーの雇用は4ヶ月間であった。そこで、速水は片時もミューラーのそばを離れず技術の習得に努めた。その結果、「本邦製糸改良の秘術を知得した」。

官営富岡製糸場開業にあたり意見を求められた速水は、規模が大きすぎることとブリュナが製糸業に熟練していないことを警告した。

速水の予見どおり官営富岡製糸場の生糸は世界市場で信用を落とした。明治11年(1878)、パリ万博に派遣された内務省勸農局長・松方正義は「トミオカシルク」の品質低下を忠告された。そこで、速水を所長にして改善を図るよう打電した。翌年伊藤博文内務卿から「改革はすべて任せる」と約束を取り付け、速水は所長となり改革に着手した。創業以来の渋沢・尾高一ブリュナ路線の転換であった。

明治13年になると、政府は速水に資金を貸与して製糸所を所有させることを内々に決めた。速水は所長を辞め、横浜に生糸直輸出商社「同伸会社」を創立し頭取に就任した。しかし、速水が富岡製糸所を所有する計画は実現せず、同18年、再び所長に就任した。速水所長時代は黄金期といわれるほどの活況を呈した。富岡製糸所の民間払い下げは政府にとって難題であったが、同26年に2回目の入札で三井家に払い下げられた。三井家が受けたのも、同所が速水によって黒字化されていたからであろう。

渋沢栄一は「日本の資本主義の父」と称された有名人である。それゆえ、渋沢栄一の関わった官営富岡製糸場は箔がつく。速水はその一生を蚕糸業に尽くした。しかし、その志は「論語と算盤」の渋沢と同じであった。速水は幼少期に藩士の大屋京介に学んだ。大屋から「人間の第一は聖人で、最も為し難いのは孝悌忠信に基づいて人の道を非の打ちどころなく行なうことである、顔回のように」と教えられ、速水は学問に励み、徳を積み聖人になれると思い「必ず顔回になる」と誓った。

明治2年、速水は生糸を買入れて横浜で売ってみると莫大な利益を得た。そのとき、この享利は世の中の人のために生かすべきだと考えた。「人間<sup>わず</sup>纔か五六十<sup>やひ</sup>年の期を以て、私利に汲々たるは野鄙なり。又百万の富を得るも易からず、若くは一生の間、之れを得るとするも、僅かに百万を子孫に残すのみ。若かず、衆人を富ましめ百万の富人を百万人作らん」と、私利を省みず、蚕糸業を通して公益に尽くすことにその一生を捧げた。

速水のような「世に知られざる徳人」を以て官営富岡製糸場を語ってこそ価値がある。各地域にはいつの時代にも、人々の幸せを祈り、その実現に努力してきた埋もれた先人がいる。そうした人々に光を当ててこそ「地域創生」が始まる。

前橋市ではアーカイヴに力を入れ、前橋学ブックレットでこれまで製糸業では次の4冊を出版した。石井寛治ほか『日本製糸業の先覚速水堅曹を語る』(1号)、速水美智子『速水堅曹と前橋製糸所』(8号)、古屋祥子『玉糸製糸の祖 小淵しち』(9号)、前橋学センター編『シルクサミット in 前橋—前橋・熊本・山鹿・宇都宮・豊橋—』(12号)。

さらに前橋商工会議所と連携し、同所創立120年を記念して『製糸の都市<sup>いとまち</sup>前橋を築いた人々』(上毛新聞社、2018年3月)を発行した。

## 前橋から発信する絹遺産周知ツール

臼井敬太郎（前橋工科大学工学部建築学科 講師）

本学の地域活性化研究事業として一昨年度より上州文化ラボと前橋における絹遺産について研究を進めている。一昨年度は古地図の読み解きから製糸工場の分布、生糸商標ラベルの収集とそれを発行した製糸工場の特定など、考古学的アプローチを取った。昨年度の研究は、これまでの絹文化の調査を生かし、蚕糸業で栄えた街の歴史をどう現代に生かすべきかを問うため、広報的アプローチとして「絹遺産周知ツール」を提案・制作した。折しも、前橋商工会議所120周年記念誌として『糸の都市 前橋を築いた人々』（平成30年3月）が刊行され、前橋の蚕糸業を振り返る機運が高まりつつある。かつて前橋に製糸工場が集積し、工女さんで賑わった街の歴史を知ることは、前橋を訪れる人の知的好奇心をくすぐり、前橋に暮らす人のシビックプライドを育てることにつながるのではないだろうか。私を含めて地元出身者でない地域活性化研究参加メンバーには、断片的に見えてくるこの街の蚕糸業の歴史そのものが新鮮である。ある意味、固定観念がないからこそフラットに対象と向き合えるのかもしれないと、地元で活躍する上州文化ラボのメンバーから蚕糸業の歴史を教わり、アイデアを交換しながら、いくつかの絹遺産周知ツールを共同提案・作成した（図1）。

具体的には、「前橋絹遺産スタンプラリー」、「建築ライティング」、「一夜だけ煙突のある街、前橋」、「シルクブランドロゴ」、「まゆボックス」、「手のり絹遺産建築模型」、「ぬいぐるみ絹遺産ツアー」、「弁当掛け紙のリデザイン」、「シルクカード」である。たとえば「前橋絹遺産スタンプラリー」は、本学の学生有志たちと前橋の誇る絹遺産を28のスタンプの絵柄に起こし、街歩きと市内回遊を促すツールに仕立てた。スタンプが押される台紙は28のマスのある蚕の種紙がモチーフになっている。「ぬいぐるみ絹遺産ツアー」は、ぬいぐるみを自分の分身として旅行させるものだ。遠出できない方、ぬいぐるみを我が子のように可愛がっている方に人気のツアーもあり、新しい観光業態としても注目されている。前橋の絹遺産に詳しい方ならば、ぬいぐるみをいかなる場所に連れて行って、どんな旅先の写真をぬいぐるみの持ち主に送るだろうか、想像するだけでもわくわくする。このように前橋の蚕糸業の歴史や栄華を周知するために、絹遺産を生かして現代的なアレンジで学びや賑わいのツールを考えることは、絹遺産の魅力を再発見するプロセスに他ならず、改めて絹遺産が示す文化的歴史的な奥行きに感じ入っているところである。

絹遺産周知ツールの提案について「まちなかキャンパス（図2）」（前橋市、前橋商工会議所共催）にて研究報告を行った。『デザインと音楽を通して探る前橋のシルク文化周知の可能性』（平成30年3月18日）と題し、前半では、各周知ルート制作担当者よりプレゼンテーションした。これらは、今後、官庁や地元企業に働きかけて、実際に広報ツールとして流通させていくことが今後の目標である。後半では音楽を通してシルク文化を学ぶ機会となった。上州文化ラボのアレンジによって招待された音楽家（小野田賢三氏、石曾根靖氏、福西みゆき氏）と旧式の蓄音機の実演（近藤節氏）によって「糸引く娘」や「上州小唄」など歴史に埋もれかけた往時の職業歌や民謡が生き生きと再生された。厳しい労働のなかで生まれたと思われる切ないメロディーや故郷の栄光を誇り高く歌い上げる歌詞に触れると、蚕糸業は生き物相手だったゆえ、まさに生活の一部、いや全てであったのだと理解された。それゆえに絹遺産について研究の間口はまだまだ広く、そこで得られた知見を伝える方法論も多様でなければと考えている。



図1. シルク文化周知ツールの提案



図2. まちなかキャンパスリーフレット



## 絹の集積地「前橋」から発信する絹産業遺産

### —まちなか養蚕とシルクカードについて—

平澤宙之（RAC/上州文化ラボ/群馬県立館林商工高等学校）

石田真弥（RAC/東京文化財研究所）

上州文化ラボ（前橋市民団体）では、絹産業遺産の保存活用を推進すべく、活動拠点である登録有形文化財「旧安田銀行担保倉庫」の一角を使用して街中での養蚕業の復活プロジェクトに取り組んでおります。また、養蚕プロジェクトと並行して絹産業遺産への理解・関心を促進させるシルクカードの制作に取り組んでおります。なお、カード制作は、公立大学法人前橋工科大学臼井研究室と進めている共同プロジェクトである。

#### -まちなか養蚕プロジェクトの背景・目的

かつて蚕糸業で栄えた前橋市では、蚕糸業の担い手が激減し、産業として危機的な状態に直面している。そこで、活動拠点である旧安田銀行担保倉庫にて倉庫オーナーの協力のもと、試験的に養蚕を始めることを計画した。この活動を通して、倉庫を絹文化の発信拠点にすることも狙いのひとつである。また、単に建物を保存するのではなく、地域の歴史文化の一翼を担ってきた蚕糸業の記憶・技術を本プロジェクトにより継承できるのではないかと期待している。

#### -まちなか養蚕プロジェクトの現状の課題

養蚕に使用する倉庫は、法規上、利用者みでの非公開施設であるため、養蚕作業を見学してもらうことは難しく、情報発信の方法を検討している。また、倉庫が街の中心部に位置することから、蚕室などの消毒に一般的に使用されているホルマリンの使用が難しいこと、近くに桑畑がないため資材調達に時間を要することが懸案事項になっている。

#### -まちなか養蚕プロジェクトの今後の展開

新規参入には、道具の手配を含め、ある程度の初期投資が必要になるが、倉庫での活動を通して新規参入者が少しでも増え、蚕糸業の衰退傾向に少しでも歯止めがかかればと期待している。また、将来的には蚕糸業に関係する業者や団体に、倉庫のテナント契約者・契約団体として関わってもらえれば、倉庫の維持管理にも貢献できると考えている。



写真1：旧安田銀行担保倉庫外観



写真2：まちなか養蚕に向けた準備

#### -シルクカード制作の背景・目的

近年、ダムやご当地マンホールがカード化されている。そのカードを獲得するためには、特定の配布場所への訪問が必要になり、それまでとは異なる新たな来訪者の獲得に成功している。ダムカードやマンホールカードは、ダムやマンホールのみを対象にカードが作成されているため、ダムの概要やご当地マンホールのある地域の紹介に留まっており、本来の

役割である産業構造の中での位置付けや価値にはあまり触れられていない。

そこでシルクカードでは、単にシルク製品を紹介するのではなく、一つのシルク製品が完成するまでの各工程をカード化させ、現在の技術を紹介する。また、歴史的な視点として、核となる施設に関連するその他の施設・道具・流通・人物などに着目し、カード化させ、個々の資産の連携をはかることを目的としている。

以下の2項目を軸にカード展開していきたい。

- ①現在の絹製品とその製品に関する技術・道具・システムなどの製品の付加価値を高められる資産
- ②現存する歴史的資産の個々の繋がりを再構築

### -シルクカードの普及方法

カードの核となる製品と歴史的資産を選定し、それぞれに関連するカードを作成する。各カードは、特定の施設や販売所でのみ配布し、製品への理解、歴史的資産への理解を促す。

### -配布効果

- ① 配布所ごとに配布条件を設定することで、来訪者への絹産業に関する理解を促進できる。
- ② 生産者、加工者、販売者、消費者、流通者、など製品に関わる人々の繋がりが生まれる。
- ③ カード配布者と来訪者との交流が生まれる。
- ④ 配布地域に現存する関連資産へも関心が向く。

### -今後の展開

すでにカード作成に関心を持っていただいている施設があるため、それらの施設から順にカードの制作を進めていく。



写真3：シルクカード（サンプル）表面

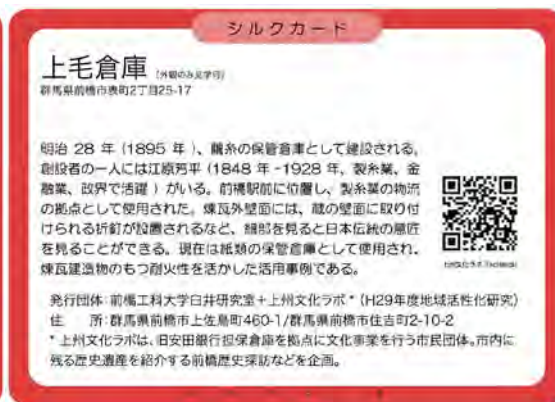


写真4：シルクカード（サンプル）裏面



## シルクロード・ネットワークふくしまフォーラム2017 記録

### ●見学会：信達地方絹遺産見学会

【日時】2017年7月8日（土）13:00-16:00

福島市民家園（福島市上名倉字大石前地内）旧小野家、旧広瀬座等見学－福島市飯野町：養蚕農家見学－おりもの展示館－福島新町教会（ヴォーリズ設計）

### ●「交流会」

【日時】2017年7月8日（土）18:30-20:30

【会場】コラッセふくしま



見学会 福島市飯野町：養蚕農家見学



交流会

撮影：田村 収

【日時】7月9日（日）・フォーラム 9:50-16:00

【会場】コラッセふくしま

【基調講演】「信達地方の養蚕、製糸、絹織業の特色について」 村川 友彦さん(シルクロード・ネットワークふくしま実行委員長)

【基調講演】「シルクの文化を活かした地域づくり」 脇坂 隆一さん(国土交通省都市局公園緑地・景観課緑地環境室 国際緑地環境対策官)

【基調報告】「絹産業資産を核とした広域地域連携の取り組み」 佐滝 剛弘さん(高崎経済大学特命教授、NPO 産業観光学習館専務理事)

【事例報告】地域の絹遺産と活用とこれから

報告者：鶴岡市・横手市増田・川俣町・入間市・川越市・日野市・横浜市・相模原市・前橋市他



フォーラム 事例報告

撮影：田村 収



フォーラム集合写真

撮影：田村 収

## シルクロード・ネットワーク 第3号

### ● レポート目次

- ・ 信達地方の養蚕・生糸・機織り～その歴史と民俗：  
村川 友彦（福島市文化財保護審議会委員・シルクロード・ネットワーク・ふくしまフォーラム実行委員長） 7
- ・ シルクの文化を活かした地域づくり：  
脇坂 隆一（国土交通省都市局公園緑地・景観課緑地環境室 国際緑地環境対策官） 10
- ・ シルク・絹産業資産のネットワークの大同団結を：  
佐滝 剛弘（高崎経済大学特命教授・NPO 産業観光学習館専務理事） 14
- ・ 蚕糸業を基盤とした商業都市ふくしま 人々の暮らしと絹織りの継承に向けた取り組み：  
梅津 司（福島市教育委員会文化課文化財係） 15
- ・ 福島県の国登録有形文化財と伊達市の取り組み：山田将之（伊達市教育委員会文化課） 17
- ・ 二本松市の養蚕・絹産業の歴史的な特色吉田 陽一（福島県二本松市教育委員会文化課） 19
- ・ 世界一薄い絹織物への挑戦：齋藤 泰行（齋栄織物株式会社 代表取締役） 20
- ・ 福島県の蚕糸業近代化遺産：田中 和夫（東京都立田無工業高等学校） 23
- ・ 山形県新庄市 旧農林省蚕糸試験場新庄支場（新庄市エコロジーガーデン「原蚕の杜」）：  
加藤 明（山形県新庄市商工観光課クールジャパン新庄推進室） 27
- ・ サムライゆかりのシルク【鶴岡シルクタウン・プロジェクト】：田中 尹（元鶴岡織物工業協同組合理事長） 28
- ・ 東京都日野市の旧蚕糸試験場日野桑園第一蚕室の保存と活用について：  
金野 啓史（日野市産業スポーツ部）・大日向 均（日野市教育委員会） 29
- ・ 横浜の絹遺産「山手西洋館」の閑散期対策および俣野別邸について：  
堀内 貴雄・松井桐人（公益財団法人 横浜市緑の協会） 30
- ・ 保次郎と信雄一石川組製糸の原ノ町進出と子女の文学活動 《事例報告レジュメに代えて》：  
染井 佳夫（「石川家の人々」を読む会会長） 32
- ・ 長野県上田市絹の道に関わる歴史：中沢 徳士（上田市教育委員会事務局生涯学習・文化財課） 36
- ・ 長野県 千曲市の絹の道 蚕糸業：矢島宏雄（千曲市歴史文化財センター所長） 37
- ・ 白川郷・合掌造りの本質とこれから：三島 敏樹（白川郷田島家養蚕展示館々長） 39
- ・ 彩の国・絹と木綿のものがたりフォーラム開催報告他：藤井 美登利（NPO 川越きもの散歩代表） 41
- ・ 前橋市養蚕業の今：村上 雅紀（上州文化ラボ） 43
- ・ 群馬県桐生市に現存する織物資産：石田真弥（NPO RAC/東京文化財研究所） 44
- ・ シルクロード・ネットワーク・新庄フォーラム 2016 記録 46



鶴岡まちなかキネマ 写真撮影：小川泰祐 設計・計画 高谷時彦事務所提供

## シルクロード・ネットワーク・鶴岡フォーラム2018

発行年月 2018年6月

編集・発行 公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）  
tel : 045-651-1730 mail : [yh-info@yokohama-heritage.or.jp](mailto:yh-info@yokohama-heritage.or.jp)  
NPO 法人 街・建築・文化再生集団（略称 RAC）  
tel : 027-210-2066 mail : [act@npo-rac.org](mailto:act@npo-rac.org)

今年も名古屋朝日軒さんにご協賛頂きました

